

## キャリアデザイン学部

## 学部基礎情報

<p><b>【理念・目的】</b></p> <p>キャリアデザイン学部は、「キャリア（生き方）」を個人が主体的に考え、設計する必要性の高まりを背景として、「自由と進歩」という本学の建学の精神を踏まえ、生涯学習社会におけるキャリアデザインの歴史と現状、課題、キャリアデザインの理論と方法、政策等に関する教育・研究を行うことを目的として、日本で最初の学部として2003年4月に設置された。</p> <p>キャリアデザイン学部は、個人の学びや発達に視点を置く「発達・教育キャリア」、産業社会のなかでの職業キャリアの展開に視点を置く「ビジネスキャリア」、家族や地域を含めた人生のあらゆる場における人と社会のあり方に視点を置く「ライフキャリア」の3つの領域を教育・研究の枠組みとして設定している。</p> <p>研究の面では、既存の学問領域における研究成果を基礎に置きつつ、これまでとは異なる社会のしくみの中での「キャリア」をめぐる新たな課題に伝えていく。</p> <p>教育の面では、「自己のキャリアを自らデザインすることのできる自律的／自立的人材」を養成すると同時に、上記の3つの領域において「他者のキャリアのデザインや再デザインに関与しつつ、その支援を幅広く行うことのできる専門的人材」を養成する。</p>
<p><b>【人材の育成に関する目的及びその他の教育研究上の目的（教育目標）】※学則別表(11)</b></p> <p>キャリアデザイン学部は、「自己のキャリアを自らデザインすることのできる自律的／自立的人材」と同時に「他者のキャリアのデザインや再デザインに関与しつつ、その支援を幅広く行うことのできる専門的人材」を養成する。少人数演習型授業と講義科目、体験型授業の3つの学習形態を通じ、かつ「発達・教育キャリア」「ビジネスキャリア」「ライフキャリア」の3領域における専門的な学びを通じて、上記の人材の育成を体系的に行う。</p>
<p><b>【ディプロマ・ポリシー】</b></p> <p>所定の単位の修得により、以下に示す水準に達した学生に対して「学士（キャリアデザイン）」を授与する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. キャリアデザインが求められる社会的背景、およびキャリアデザインに関する基本的な知識やアプローチの方法について幅広く理解している。</li> <li>2. 特定のアプローチについては、専門的知識を有し、それを活用できる。</li> <li>3. キャリアデザインに関わる社会現象や政策・施策等について、自ら研究を深め、一定の成果を残すことができる。</li> </ol>
<p><b>【カリキュラム・ポリシー】</b></p> <p>本学部では、学位授与方針を踏まえ、以下の通り教育課程を編成・実施する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教育課程       <p>教養教育科目と専門教育科目から構成する。教養教育科目（市ヶ谷基礎（ILAC）科目）においては、幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する。専門教育科目は少人数演習型授業と講義科目、体験型授業によって構成し、系統的な履修を促す。</p> </li> <li>2. 初年次教育       <p>教養教育科目を幅広く履修することに加え、アカデミック・スキルの習得を目的としつつ学部の専門教育科目への関心を高めるねらいも併せもつ「基礎ゼミ」を1年次春学期の必修科目に位置づけ、少人数演習型授業として実施する。また、1年次から専門教育科目のうち基幹科目の履修を促す。</p> </li> <li>3. 専門教育科目       <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 少人数演習型授業           <p>「基礎ゼミ」の履修を前提に、調査研究法の基礎を習得する科目の履修につなげる。2年次秋学期から4年次にかけては、専門的な学びを深めることを目的とした演習（ゼミ）を設け、卒業論文の執筆を通じた研究成果の取りまとめを促す。</p> </li> <li>(2) 講義科目           <p>「基幹」科目の幅広い履修を踏まえて「発達・教育キャリア」「ビジネスキャリア」「ライフキャリア」の3領域のいずれかを選択し、「展開」科目において専門的な学びを深めるよう促す。これらと「関連」科目をあわせた系統的な履修を促す。</p> </li> <li>(3) 体験型授業</li> </ol> </li> </ol>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

企業・学校・コミュニティなどにおける他者との関わりを通じた体験的な学びとスキルの習得を目的とした体験型授業を必修科目に位置づけ、知識と体験の統合を促す。

【アドミッション・ポリシー】

本学部の教育目標を理解した者であって、下記の資質・能力を備えた学生を受け入れる。

- 高校までに履修する科目について、入学時に十分な基礎的知識を身につけている
- 現実の社会のあり方とその中での人々のキャリアに関心をもっており、学問的に考察を深める意欲をもっている
- 多様な他者の価値観を尊重したうえで、多様な人々と主体的に関わる意欲をもっている

多様な学生が関わりあう中で学びあうことを重視する観点から、下記の通り、様々な入試経路を通じて多様な学生を受け入れる。

- 一般選抜（A方式、T日程および大学入学共通テスト利用入試）：十分な基礎的知識にもとづく思考力・判断力・表現力を備えている
- 学校推薦型選抜（指定校推薦、付属校推薦、スポーツ推薦入試）：十分な基礎的知識をもち、本学部における学びへの高い意欲をもっている
- 総合型選抜（キャリア体験自己推薦入試、グローバル体験公募推薦入試、商業学科等対象公募推薦入試、国際バカロレア利用自己推薦入試）：十分な基礎的知識をもつとともに、多様な経験を積んでおり、自らの関心や学びの展望についての確に表現することができる

【定員管理の状況】

定員充足率(2017～2021年度)(各年度5月1日現在)

年度	入学定員	入学者数	入学定員充足率	収容定員	在籍学生数	収容定員充足率
2017	294	311	1.06	1,176	1,425	1.21
2018	294	289	0.98	1,176	1,387	1.18
2019	294	292	0.99	1,176	1,369	1.16
2020	294	292	0.99	1,176	1,270	1.08
2021	300	302	1.01	1,182	1,233	1.04
5年平均			1.01			1.13

※1 定員充足率における大学基準協会提言指針

【対象】

- ①学部・学科における過去5年間の入学定員に対する入学者数比率の平均
- ②学部・学科における収容定員に対する在籍学生数比率

【定員超過の場合】※医学・歯学分野は省略

提言	改善課題	是正勧告
実験・実習を伴う分野 (心理学、社会福祉に関する分野を含む)	1.20 以上	1.25 以上
上記以外の分野	1.25 以上	1.30 以上

【定員未充足の場合】

提言	改善課題	是正勧告
すべての分野共通	0.9 未満	0.8 未満

※2 定員充足率における私立大学等経常費補助金不交付措置の基準

年度	～2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
入学定員超過率	1.20 以上	1.17 以上	1.14 以上	1.10 以上	1.10 以上	1.10 以上	1.10 以上
収容定員超過率	1.40 以上						

【求める教員像および教員組織の編成方針】(2018年度自己点検・評価報告書より)

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

キャリアデザイン学部の教員に求められるのは、理念・目的についての基本的理解に立ったうえで、自らの研究および教育を遂行することのできる高い能力と倫理性であり、学部の教育目標、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーを踏まえた教育活動や学生指導を行なう意欲と専門的な力量である。また、個人として研究・教育を遂行するだけでなく、教員間の組織的連携やチームとしての研究・教育の実施に積極的に参加し、貢献することが求められる。

教員組織の編制においては、各教員の専門性や適性を踏まえつつ、学部運営および教育においてその一翼を主体的に担えるように配慮すると同時に、教員間の組織的連携によって学部運営および学生に対する教育に学部全体で責任を負うという体制を築いていく。そのために、チームとして取り組む各種委員会活動やFD活動等を通じて、教員組織に「同僚性」の文化を育て、各教員の力量形成と教員集団としての教育力の向上が相乗的に期待できるような「学習する組織」を築いていく。

【専任教員数および年齢構成一覧】

2021年度専任教員数一覧（2021年5月1日現在）

教授	准教授	講師	助教	合計	設置基準上 必要専任 教員数	うち教授数
26	1	0	0	27	17	9

専任教員1人あたりの学生数（2021年5月1日現在）：45.7人

年齢構成一覧（2021年5月1日現在）

年度\年齢	61歳～70歳	51歳～60歳	41歳～50歳	31歳～40歳	30歳以下
2021	7	9	11	0	0
	25.9%	33.3%	40.7%	0.0%	0.0%

I 2021年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2021年度大学評価結果総評】（参考）

キャリアデザイン学部における「2021年度自己点検・評価シート」を読むと、学部の教育目標にもとづいた教育課程の編成・実施方針に沿った適切な科目配置がなされていることが見てとれ、高く評価できる。また、学部の就職委員会や学部所属の専門スタッフであるキャリアアドバイザーを中心に手厚い就職支援を提供する仕組みを確立するなど、キャリア教育を看板に掲げている学部の強みを生かしつつ、創意工夫に富んだ取り組みを積極的かつ継続的に行なっている点も評価に値する。また、コロナ禍という未曾有の事態を受け、柔軟かつスピーディーな対応がさまざまな局面で求められるなか、「2021年度中期目標・年度目標達成状況報告書」の「重点目標」には、時宜にかなった適切な方針が示されており、この点も特筆に値する。「目標を達成するための施策等」でも示されているとおり、「オンライン担当委員」を中心とした種々の活動が軌道に乗ることを期待したい。

一方、「2020年度中期目標・年度目標達成状況報告書」の「教育課程・学習成果」の年度目標②において、「質保証委員会による点検・評価」の「所見」として、時間割編成の見直しが一定の効果をあげているとの認識が示されるのと同時に、同科目のいわゆる「供給超過」の懸念が指摘されている。この点に関する組織的な検討が望まれる。

【2021年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2021年度の大学評価室委員会による評価では、いずれの項目においてもおおむね良好な結果を得ることができたが、これに安住することなく、本年度も引き続き小規模学部としての特質を生かして、機動力および実効力を伴う学部の運営を心がけたい。コロナ禍の状況は依然として予断を許さないところであるが、この二年間でオンライン／対面の併用による授業実施のノウハウもかなり蓄積されてきた。今後は学部の教育理念・教育目標に即しつつ、より効果的かつ持続可能なオンライン活用の可能性を探っていくこととしたい。大学生を取り巻く社会のさまざまな変化に対応するために、本学部では2021年度より、大規模なカリキュラム改革に向けての議論を開始した。折しも全学で授業科目数のスリム化の動きが具体化されたこともあり、21年度の大学評価においてご指摘をいただいた、同一科目の複数コマ展開（いわゆる「供給過多」）の問題については、このカリキュラム改革の作業の過程で慎重に対応を検討していく予定である。

【2021年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

キャリアデザイン学部では、2021年度の評価は非常に高いものであったが、それに安んじることなく、目の前にある課題に対応していくと述べられている。しかし、これらの課題には大規模なカリキュラム改革、授業科目のスリム化、同一科目の複数コマ展開などいずれも大きなものばかりで、短時間での解決は難しいと思われる。すでに議論は開始したとあり機動力のある学部であることから、今後の対応に期待したい。2020年、21年度におけるもう一つの課題はCOVID19への対応であったが、これにはすでに臨機応変、かつ首尾良く対応されている。

## II 自己点検・評価

### 1 理念・目的

#### (1) 点検・評価項目における現状

1.1 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、学部・研究科の目的を適切に設定しているか。

1.1①学部（学科）の理念・目的は大学の理念・目的を踏まえて設定されていますか。2018年度 1.1②に対応

はい

1.1②理念・目的の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。2018年度 1.1③に対応

※検証を行う組織（教授会や各種委員会等）や検証の時期等、具体的な検証プロセスを記入。

本学部では年三回（年度はじめ、秋学期開始時、年度末）、教授会の構成メンバー全員が参加するFDミーティングを開催しているが、それらのうち年度はじめのミーティングにおいて、大学の理念・目的およびそれを踏まえた学部の理念・目的について再確認する機会を設けている。また、これまでに大規模なカリキュラム改革を二回実施し、現在第三回目の改革に向けて準備中であるが、その都度、学部の理念・目的についての総合的な検証を行ってきた。このたびも、学部の理念・目的を絶えず意識しつつ、学部内の三領域（発達・教育キャリア領域、ビジネスキャリア領域、ライフキャリア領域）から過不足なく参加者を募り、ワーキンググループによる具体的な検討を経たのち、教授会において全体での議論と認識の共有を行ってきている。一方、学部の理念・目的に対する客観的な立場からの検証の手段として、毎年秋に開催する学部主催のシンポジウムにおいて、学部教育に深く関連するテーマを取り上げ、学外の専門家を複数交えて実践事例の報告やディスカッションを行い、その妥当性を点検するとともに新たな知見を得る機会としている。

1.2 大学の理念・目的及び学部・研究科等の目的を学則又はこれに準ずる規則等に適切に明示し、教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。

1.2①学部（学科）の理念・目的は学則又はこれに準ずる規則等に明示していますか。2018年度 1.2①に対応

はい

1.2②学部（学科）の理念・目的を教職員及び学生に周知し、社会に対して公表していますか。2018年度 1・2②に対応

はい

#### (2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

#### 内容

本学部の理念・目的については、学部パンフレットや学部ホームページ、在学生向けの「履修の手引き」等を通じて広く公表している。対外的なアクションとしては、学部シンポジウムの開催や法政大学キャリアデザイン学会（本学部創設時に設置）主催の研究会、さらには高校における模擬授業等の機会を活用して、本学部の理念・目的を積極的に伝えていくことを心がけている。一方、学生に対しては、新入生オリエンテーションや履修ガイダンスの機会に、学部の理念・目的の周知を図るよう努めている。特に新入生に対しては、学部創設十周年を記念して出版した『キャリアデザイン学への招待』（ナカニシヤ出版）を毎年全員に配布し、学部の目ざすところについて理解を深めるよう配慮している。ウェブ社会の著しい進展に対応して、近年では、学部の広報委員会を中心に独自に制作したYouTube動画やゼミ紹介動画等をホームページに掲載することによって、学部の理念・目的をより容易かつわかりやすいかたちで伝える工夫を重ねている。

#### (3) 課題・問題点

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
上に挙げた『キャリアデザイン学への招待』は、新入生にとって学部の理念・目的を理解する拠りどころとしての役割を果たしてきたが、出版から十年近く経ち、情報のアップデートが望まれるようになったため、間もなく迎える学部創設二十周年を機に、改訂版を編集・刊行する予定である。また、ウェブを通じての情報伝達は今後さらに進むことが予想されるため、学部ホームページをいっそう充実させていくことを検討している。

**【理念・目的の評価】**

キャリアデザイン学部では学部内で毎年3回FDミーティングを開催して、学部の理念や目的等について確認し、その結果を教授会メンバーが全員で共有している。また、学部の研究・教育の基本をなす3領域から参加者を募るワーキンググループでより具体的な検討をしている。さらに学外の専門家を複数交えたシンポジウムを毎年開催し、実践的な事例なども検討し、さらに高校での模擬授業を活用して学部理念を検討し、外部に公表していることは高く評価できる。
--

**2 内部質保証**

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

2.1①質保証委員会は適切に活動していますか。2018年度2.1①に対応

はい
<p>【2021年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学部自己点検・質保証委員会の構成： 学部の三領域（発達・教育キャリア領域、ビジネスキャリア領域、ライフキャリア領域）をカバーする3名の教員から成り、うち1名を委員長とする。</li> <li>・会議開催日・議題等： 2021年度の自己点検・質保証委員会では、コロナ禍における委員会活動を円滑に進めるために、サイボウズのスレッドを徹底して活用した。年度開始前の3月26日から翌年2月22日まで、合計43回の書き込みによって、学生モニタリング調査のインタビューの計画立案とそのまとめや、自己点検シートの評価原案についての検討などを推し進めてきた。また、2021年11月19日（金）にズームにて実施した学生モニタリングのインタビュー後、引き続きオンラインにて関連内容についての委員会ミーティングを開催した。</li> </ul>

2.1②質保証委員会等の内部質保証推進組織は、COVID-19への対応・対策の措置を講じるにあたってどのような役割を果たしましたか。新規

※取り組みの概要を記入。
<p>本学部では、2021年度の年度目標のうち、重点目標として「オンラインと対面の併用の中で、学生たちが不利益を被ることなく学修を進めることができるよう努める」を掲げ、その達成に向けて学部を挙げて取り組んできた。自己点検・質保証委員会においては、毎年実施している学生モニタリング調査をCOVID-19への対策の機会のひとつととらえ、入学時よりコロナ禍に見舞われた2年生（2020年度入学）を対象を絞り、学修や日常生活における現状や課題について聞き取りを行った。その結果についてはFDミーティングで詳細に報告され、併せて同委員会による見解や提案も示された。特にオンライン授業と対面授業それぞれの長所短所を踏まえたベストミックスの推進をはじめ、コロナ収束後も見すえたファカルティ・ディベロップメント実践に向けての有意義な提言があった。</p>
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「2021年度中期目標・年度目標達成状況報告書」（「重点目標」の項目）</li> <li>・「2021年度キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」（「内部質保証委員会」の項目）</li> <li>・第3回FDミーティング資料『自己点検シート』『中期・年度目標達成報告書』に関する質保証委員会からの所見（2022年2月25日）</li> </ul>

(2) 長所・特色

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
<p>本学部では、毎年年度末に開催される第3回FDミーティングにおいて、学部自己点検・質保証委員会の主導により当該年度の総括を行っている。その際、「キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」として、学部内の主な活動や主要科目について、予め担当の教員や委員会委員長に詳しい記入を要請している。さらにその内容を土台として、「中期目標・年度目標達成状況報告」が執行部により作成され、上述の総括の際の資料として活用されている。この二段階の文書作成を通して、授業内容や学部運営に関して遺漏なく目配りとチェックがなされている点は、本学部の長所であり、また記録の蓄積という点でも非常に有益であるといえる。</p>

### (3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
<p>上述の「キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」は、質保証委員会の強力なイニシアチブのもとで作成され、非常に綿密で充実した内容となっているが、執筆に多大な労力を要するため、教員のあいだから改善の希望が出始めている。今後は、本シートの意義を改めて確認・共有するとともに、記載内容の簡略化を探っていくこととした。</p>

### 【内部質保証の評価】

<p>キャリアデザイン学部の質保証委員会では、学部の研究・教育の基本構造をなす3領域から出ている委員を中心に議論を重ね、それをサイボウズのスレッドを活用して検討結果を共有している。スレッドは年間43回という頻度で改定されていることから、活発な活動の様子が伺える。COVID19が学生に与えた影響把握には、毎年実施している学生モニタリング調査を活用し、その結果はFDミーティングを通して情報共有が図られている。</p> <p>ただ、サイボウズのスレッド改定頻度にもその一端が見られるように、教員への負担が気になる。学部職員にも負担が及んでいるかは知り得ないが、持続可能性を考えると早期の検討が望まれる。</p>
--

## 3 教育課程・学習成果

### (1) 点検・評価項目における現状

3.1 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

3.1①学部（学科）として修得すべき学習成果、その達成のための諸要件（卒業要件）を明示した学位授与方針を設定していますか。2018年度3.1①に対応

はい

3.2 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

3.2①学生に期待する学習成果の達成を可能とするための教育課程の編成・実施方針を設定していますか。2018年度3.2①に対応

はい

3.2②教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針を周知・公表していますか。2018年度3.2②に対応

はい

【根拠資料】 ※冊子名称やホームページURL等。

・キャリアデザイン学部ホームページ（「カリキュラム・ポリシー」「ディプロマ・ポリシー」「カリキュラム・マップ」「カリキュラム・ツリー」の各ページ）

<https://www.hosei.ac.jp/careerdesign/>

・「22年度キャリアデザイン学部履修の手引き」（「カリキュラム」pp.5-13.）

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

<https://hosei-hondana.actibookone.com/>

3.2③教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性と関連性の検証プロセスを具体的に説明してください。

2018年度3.2③に対応

S： さらに改善することができた

※検証を行う組織（教授会や各種委員会等）や検証の時期等、検証プロセスを記入。

本学部では、年度はじめに執行部の主導のもとで開催される第一回 FD ミーティングにおいて、学部の教育目標や学位授与方針について教授会メンバー全員で再確認するとともに、当該年度における教育課程の編成・実施方針に関する認識を共有するために、主だった科目の担当教員からそれぞれの科目の目ざすところや改善予定の点などについて説明がなされ、質疑応答が行われる。年度途中（秋学期開始時）の第二回 FD ミーティングでは、それらについての中間的な点検が行われ、必要に応じて速やかな対応に繋げるよう努めている。年度末の第三回 FD ミーティングにおいては全体の総括を行い、現状と課題を明確に把握したうえで次年度に向けての土台作りを行っている。毎年このサイクルを繰り返すことにより、教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性と関連性をたゆまなく検証し、改善に結びつけることが可能となっている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

本学部では、2007年、2012年に大幅な教育課程の改編を実施し、さらに2017年にも部分的な見直しを行った。コロナ禍によってリモート化が一挙に進んだことも含め、近年、学生を取り巻く社会環境が急激に変化している状況に対応するために、2021年度より次の改編に向けての検討を開始したところである。議論に先立ち、学生の学修環境や学びに関するニーズを把握するために、執行部と教務委員会の協力のもとで全学部生対象のアンケートをオンライン上で実施した。その結果も踏まえ、学部の三領域から中堅の教員の参加を募り、ワーキンググループによる議論を重ねてきた。その結果は随時教授会にて共有され、全体でのディスカッションへと展開している。この過程で、学部の教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性と関連性が改めて議論の俎上に載せられ、現在なおそれらの詳細な検証と今後の対応についての議論が続けられているところである。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2021年度第15回教授会資料B06-1「カリキュラムWG経過報告」（2022年2月25日）
- ・2021年度第15回教授会資料B06-2「カリキュラムWG学部調査概要」

3.3 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

3.3①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。2021

年度1.1①に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。

本学部では、①自己のキャリアを主体的にデザインすることができる能力の涵養と、②他者のキャリアのデザインや再デザインの支援を行うことができる専門性の習得、というふたつの教育目標に基づいて教育課程の編成・実施方針を定め、それにしたがって適切な教育内容を提供できるよう科目を配置している。2017年度に作成した「カリキュラム・マップ」では、学部のディプロマ・ポリシーを土台として8つの「学習の目標」を掲げ、各々の科目がそのいずれを目ざしているのか明示している。また同年作成した「カリキュラム・ツリー」によって、各科目がどの年次にどのような関連性をもって配置されているのかをわかりやすく図示している。基本的には、1年次に「キャリアデザイン学入門」をはじめ入門系の科目によって基礎的な知識や調査スキルを学び、2年次以降に「発達・教育キャリア」「ビジネスキャリア」「ライフキャリア」の3つの領域にそって専門性を深めていくとともに、2年次秋学期から始まる「専門演習（ゼミ）」においてさらに問題意識を掘り下げ、4年次の卒業論文執筆や「キャリアデザイン学総合演習」で学びを総括する構成になっている。その一方で、2年次以降に履修できる体験型科目（選択必修）において、企業、NPO、学校など、学外の多様な現場での体験学習を通して、自己と他者のキャリア形成について実践的に理解・学習し、その成果を教室での学びに還元させる仕組みとなっている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

<p>【根拠資料】※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページURLや掲載冊子名称等</p> <p>・「2022年度キャリアデザイン学部履修の手引き」（「カリキュラム」 pp. 5-10.）  <a href="https://hosei-hondana.actibookone.com/">https://hosei-hondana.actibookone.com/</a></p> <p>・キャリアデザイン学部ホームページ「カリキュラム」（「カリキュラム・マップ」「カリキュラム・ツリー」のページを含む）  <a href="https://www.hosei.ac.jp/careerdesign/shokai/curriculum/">https://www.hosei.ac.jp/careerdesign/shokai/curriculum/</a></p> <p>・「2022年度キャリアデザイン学部パンフレット」 pp. 4-6.  <a href="https://edu.career-tasu.jp/p/digital_pamph/frame.aspx?id=3942400-0-62">https://edu.career-tasu.jp/p/digital_pamph/frame.aspx?id=3942400-0-62</a></p>
---

3.3②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。2021年度1.1②に対応

<p>A： 従来通り効果的に取り組むことができた</p>
<p>※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修（個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ（必修・選択等）含む）への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。</p> <p>本学部では、教養教育と専門教育を切り分けて学修していくのではなく、互いに相乗効果をもたらすことを期して、1年次より市ヶ谷基礎（ILAC）科目に加えて、「基幹科目」として専門科目を複数置き、その多くを必修・選択必修としている。それらを通してキャリアデザインに関する基礎的な理解と幅広い視野を形成したのち、2年次以降は学生各自の関心にしたがって、「発達・教育キャリア」「ビジネスキャリア」「ライフキャリア」の3つの領域のいずれかを軸に、それぞれの領域に対応した「展開科目」および「演習（ゼミ）」の履修によって専門的な学びを進めていく。4年次には、「卒業論文」や「キャリアデザイン学総合演習」を通して学部での学びの集大成を行う。このように、共通→分化→統合という流れにそってカリキュラムを設計することにより、学修の順次性・体系性を確保している。また、専門科目群と並行して、3つの領域を横断するかたちで、本学部の大きな特色である選択必修の体験型科目群を置き、理論のみならず実践的な観点からキャリアデザインにアプローチする機会を設け、知識と体験の統合を図っている。なお、キャリアデザインをめぐる研究に必要な方法論の習得については、2017年度より、「キャリア研究調査法入門」（1年次必修）→「キャリア研究調査法（質的／量的）」（2年次選択必修）→「キャリア研究調査法実習」（展開科目）という具合に科目の順次性・階梯性を整え、最終的に演習や卒業論文における研究に生かせるよう配慮している。</p>
<p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>特になし</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・「2022年度キャリアデザイン学部履修の手引き」（「カリキュラム」 pp. 5-10.）  <a href="https://hosei-hondana.actibookone.com/">https://hosei-hondana.actibookone.com/</a></p> <p>・キャリアデザイン学部ホームページ「カリキュラム」  <a href="https://www.hosei.ac.jp/careerdesign/shokai/curriculum/">https://www.hosei.ac.jp/careerdesign/shokai/curriculum/</a></p> <p>・「2022年度キャリアデザイン学部パンフレット」 pp. 4-6.  <a href="https://edu.career-tasu.jp/p/digital_pamph/frame.aspx?id=3942400-0-62">https://edu.career-tasu.jp/p/digital_pamph/frame.aspx?id=3942400-0-62</a></p>

3.3③幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。2021年度1.1③に対応

<p>A： 従来通り効果的に取り組むことができた</p>
<p>※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。</p> <p>本学部では、キャリアデザインが求められるようになった歴史的・社会的背景を幅広い視野に立って理解するとともに、社会の諸課題を発見したり、それに対する解決方法を主体的に探ったりするうえで必要な思考力や発信力を養うために、1年次より、人文科学や社会科学、情報科学等からなる市ヶ谷基礎（ILAC）科目と、学部の専門科目（基幹科目）とをバランスよく履修し、総合的な力を身につけることができるよう教育課程を編成している。また、豊かな人間性の涵養には、教室での学びだけでなく学内外で多様な人びととコミュニケーションを図りながら協働することが非常に有効であるため、体験型の授業を重視し、丁寧な事前指導・事後指導と合わせて体験学習の成果をより高めるよう配慮している</p>
<p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>特になし</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・「2022年度キャリアデザイン学部履修の手引き」（「科目」pp.14-23.）</p> <p><a href="https://hosei-hondana.actibookone.com/">https://hosei-hondana.actibookone.com/</a></p>
--

3.3④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。2021年度1.1④に対応

<p>A： 従来通り効果的に取り組むことができた</p>
<p>※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。</p> <p>本学部の初年次教育については、市ヶ谷基礎（ILAC）科目の「基礎ゼミ」（必修）において、大学での学びに必要なアカデミック・スキルの習得を徹底させている。新入生全員が等しく確実に学修できるよう、各クラス20名程度の少人数に抑えている。全16クラスのうち半数程度は兼任教員が担当しているため、標準シラバスと共通テキストを用意し、授業内容の平準化に配慮している。また、1年次から学部の専門科目（基幹科目）として「キャリアデザイン学入門」や「キャリア研究調査法入門」（いずれも必修）等の入門系科目を配置し、2年次以降の専門的な学びへの導入に位置づけている。一方、グローバル化に伴う外国語習得の必要性やデータ・サイエンスの重要性の高まりに対応するために、新入生ガイダンス等の機会を活用して、外国語科目や情報系科目の積極的な履修を促している。なお、付属校および指定校推薦による入学予定者に対しては、高校3年の三学期対応として、学部の全教員から推薦図書を募ってリスト化し、大学での学びに備えて事前に学習しておくよう指導している。</p>
<p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>特になし</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・2022年度新入生ガイダンス資料（「英語ガイダンス」を含む）（2022年4月1日）</p> <p>・2022年度第1回FDミーティング資料F-03「基礎ゼミ」（2022年4月8日）</p> <p>・2022年度新入生向け推薦図書リスト</p>

3.3⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。2021年度1.1⑤に対応

<p>A： 従来通り効果的に取り組むことができた</p>
<p>※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。</p> <p>本学部では学生の国際性を涵養するために、語学力・知識・体験の3点に留意して科目を配置している。語学力については、市ヶ谷基礎（ILAC）科目の英語・諸語科目に加え、学部の関連科目としてネイティブの講師による少人数制の「国際コミュニケーション語学」を複数コマ置いているほか、3つの専門領域（発達・教育キャリア、ビジネスキャリア、ライフキャリア）のそれぞれに対応した「外書講読」を2コマずつ用意している。また国際社会に関する知識や理解を深めるために、学部の展開科目として「国際経営論」「国際地域研究」「多文化社会論」といった科目を配置している。「演習（ゼミ）」においても、英文ジャーナルをテキストに用いたり、オンラインで海外の人びとと交流する活動を行ったりするクラスが少なくない。一方、海外での体験の機会として、「キャリア体験学習（国際）」ではベトナムと台湾、「SA（スタディ・アブロード）」ではオーストラリアとニュージーランドに滞在し、現地の生活文化を学んだり、海外企業でインターンシップを行ったりするプログラムを提供している。2020年度に続いて2021年度も、コロナ禍のためこれらの海外渡航は中止を余儀なくされたが、代りに都内の関連施設を訪問したり、オンラインで現地の学生や企業と交流したりする等の工夫を継続して行った。なお、国際性を具えた多様な学生を受け入れるために、外国人留学生の枠に加え、国際バカロレア利用自己推薦やグローバル体験公募推薦、海外高校や日本語学校の指定校推薦など、様々な入試形態を積極的に導入している。</p>
<p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>特になし</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・「2022年度キャリアデザイン学部履修の手引き」（「ILAC科目一覧」「専門科目一覧」「留学」の各ページ）</p> <p><a href="https://hosei-hondana.actibookone.com/">https://hosei-hondana.actibookone.com/</a></p> <p>・「2021年度キャリア体験学習（国際・ベトナム）報告書」</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

・「2021年度キャリア体験学習（国際・台湾）報告書」

3.3⑥学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。2021年度

1.1⑥に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

本学部の名称が示すとおり、学部の目標そのものが、自己および他者のキャリア形成をめぐる様々な課題に主体的に取り組む力を身につけることにあり、すべての専門科目がキャリア教育としての性質を帯びている。より具体的には、1年次より「キャリアデザイン学入門」をはじめとする入門系の科目を通して「キャリアデザイン」という考え方の土台を築くとともに、「ライフコース論」や「職業選択論」、「若者の自立支援」、「キャリアモデル・ケーススタディ」といった基幹科目を履修することによって、早くから社会的・職業的自立に向けての意識を涵養するよう促している。また2年次以降に履修できる体験型科目群は、企業やNPOなど社会の多様な場でのキャリアのあり方を実地で経験することにより、学生自身の将来のキャリア設計について大きな示唆を得る機会となっている。一方、学部の就職委員会を中心に、主として3年生を対象に様々な就職支援プログラムを提供している。2020年度に続き2021年度も、コロナ禍のため企業人との交流会のような対面の企画は実施できなかったが、「就職カフェ」と称して、就活に関わる情報や上級生の就活体験談を複数回発信した。こうしたイベントの多くは、学部所属の専門スタッフであるキャリアアドバイザー5名の協力を得て実施されるが、アドバイザーは学生からの個別の相談にも適宜応じ、丁寧な面談を通して就活生の支援を行っている。また本学部では独自の「キャリアアップ奨励金制度」を設け、毎年、学部の趣旨に合致した資格試験の受験料や講座の受講料を補助している。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2022年度第1回FDミーティング資料F-15「就職委員会」（2022年4月8日）
  - ・2022年度第1回FDミーティング資料F-18「キャリアアドバイザー制度運営委員会」
  - ・「2022年度キャリアデザイン学部履修の手引き」（「キャリアアップ奨励金制度」p.79.）
- <https://hosei-hondana.actibookone.com/>

3.4 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

3.4①学生の履修指導を適切に行っていますか。2021年度1.2①に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

【履修指導の体制および方法】※箇条書きで記入。

◎1年次

- ・毎年4月1日に開かれる「新入生ガイダンス」において、教務委員会、英語担当教員、キャリアアドバイザーを中心に、大学における学びの特徴や履修上の諸注意について詳細な指導を行っている。2021年度に続いて2022年度も複数教室を用いて対面で実施したが、併せて関連資料を学部の掲示板にも掲載して周知の徹底を図っている。
- ・キャリアアドバイザー制度運営委員会の主催で、毎年4月に、学部の上級生がピアサポーターとなって「履修相談会」を開催し、個別具体的なサポートが新入生から好評を得ている。2021年度に続いて2022年度も対面で実施し、多くの参加者を得た。
- ・春学期開講の「基礎ゼミ」（必修）において、キャリアデザイン学部で学ぶことの意義や目的を新入生一人ひとりがしっかりと理解するよう指導している。

◎2年次

- ・前年3月末に「体験型科目履修ガイダンス」を実施し、各コースの実習内容や選考プロセスについて、配布資料をもとに詳細な履修指導を行っている。2022年度の履修に向けたガイダンスはオンラインから対面に戻し、併せて関連資料を学部掲示板に載せて周知を徹底させた。また体験型科目の実習報告書を学生に公開し、履修コースを選ぶ際の参考となるよう配慮している。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

<p>・毎年5月に、教務委員会の主導で「ゼミ履修ガイダンス」を実施し、秋学期からのゼミ履修に備えて詳細な情報提供を行っている。また、毎年年度末に実施する「学生研究発表会」の要旨集も併せて公開し、学生のゼミ選びの参考に資するよう配慮している。2022年度春は、ゼミ見学の期間を2週間から3週間に延ばすとともに、各ゼミからゼミ紹介の動画の提供を募り、学部掲示板を通じて公開することによって、学生がより適切なゼミ選択を行えるよう工夫している。</p> <p>◎その他</p> <p>・キャリアアドバイザーが随時、全学年の学生に対して個別に相談を受け付け、履修指導や学習のサポートに当たっている。</p> <p>・各ゼミの担当教員が、それぞれのゼミの研究テーマに近接する展開科目や関連科目の履修を促すことにより、ゼミ生が専門性を深化させるよう配慮している。</p>
<p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>特になし</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・「2022年度キャリアデザイン学部履修の手引き」（「専門科目の紹介及び履修上の注意」pp. 28-33.）  <a href="https://hosei-hondana.actibookone.com/">https://hosei-hondana.actibookone.com/</a></p> <p>・「2022年度新入生ガイダンス」資料（「英語ガイダンス」資料を含む）</p> <p>・「2022年度用体験型科目履修ガイダンス」資料</p> <p>・学部掲示板「2022年度ゼミ募集・選考について」（動画「ゼミ選択のツボ」、「第16回学生研究発表会報告要旨集」、ゼミ紹介動画、等を含む）  <a href="https://hosei-keiji.jp/cd/class/220428_01">https://hosei-keiji.jp/cd/class/220428_01</a></p> <p>・「2021年度キャリアサポート実習成果報告書」</p> <p>・「2021年度キャリア体験学習報告書」</p> <p>・「2021年度キャリア体験学習（国際）報告書」（ベトナム／台湾）</p> <p>・「2021年度地域学習支援報告書」</p>

3.4②学生の学習指導を適切に行っていますか。2021年度1.2②に対応

<p>A： 従来通り効果的に取り組むことができた</p>
<p>※取り組み概要を記入。</p> <p>本学部では、「キャリアデザイン学入門」をはじめ学部の基幹となる科目の多くを原則として専任教員が担当することにより、学生に対してより直接的・継続的な学習指導が行えるよう配慮している。一方、基礎能力の習得を旨とする「基礎ゼミ」や「キャリア研究調査法」、英語科目等については、学修の徹底を期して少人数クラスを複数コマ展開しており、かなりの部分を兼任教員に委ねざるをえない状況にある。そのため、それぞれの科目の担当責任者として専任教員を配置し、授業の運営方法、課題内容、成績評価の基準などについて情報の共有を密に行い、均質な学習指導が実践されるよう努めている。とりわけ英語科目は、兼任教員の割合が著しく大きく、また ILAC 英語分科会の方針とのすり合わせも必要であり、学部内の英語担当教員（1名）に多大な負荷がかかっている。そのため2022年度より、当該教員の負担を可視化し、他の教員がその内容を明確に認識できるように、「英語科目管理担当」委員という役割を新たに設けることとした。なお、本学部では大半の学生がゼミに所属しており、担当教員が個々のゼミ生に対して丁寧な学習指導を行っているが、一方で様々な理由によりゼミに所属していない学生については、十分目が届かない可能性がある。そこで、ゼミを履修していない学生（任意）および成績不振（並びに留級・卒業保留）の学生（必須）については、キャリアアドバイザーが個別に面談を実施し、学修の支援に当たっている。</p> <p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>特になし</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・「2021年度キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」（「FD活動」「主要科目」内の各項目、「語学」「アドバイザーによる学生支援」等）</p> <p>・2022年度第1回FDミーティング資料F-18「キャリアアドバイザー制度運営委員会」（2022年4月8日）</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

3.4③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。2021年度1.2③に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた
※取り組み概要を記入。
<p>学生が授業時間以外にも予習・復習等のために十分な学習時間を確保するよう、シラバスにおいて各々の授業について「準備学習・復習時間は各2時間を標準とする」旨を記載するとともに、具体的にどのような自主学習が必要か、できるだけ明確に示すよう努めている（例えば「学期末の成果発表会に向けて準備作業に一定時間を要する」「ゲスト講師の回には必ず下調べを行う」等）。また2021年度からは、学習の効果をより把握しやすくするために、教員からの具体的なフィードバックの方法をシラバスに明記している。「基礎ゼミ」をはじめ複数コマ展開の科目では、課題の内容や量について予め統一的な方針を定めておくことにより、クラス間に学習の差が生じないよう気を配っている。本学部では2年次の秋学期以降、「演習（ゼミ）」が専門の学びの中心を占めることになるため、フィールド調査やプレゼンテーションの準備など、授業時間外に相当の学習量が要求される。そこで多くのゼミは、正規の時間外に「サブゼミ」を開設し、学びの深化を図るとともに学習の習慣づけに大きく寄与している。</p>
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
特になし
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・2022年度キャリアデザイン学部 Web シラバス <a href="https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AM&amp;t_mode=pc">https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AM&amp;t_mode=pc</a></li> <li>・学部掲示板「2022年度ゼミ履修の手引き」 <a href="https://hosei-keiji.jp/cd/class/220428_01">https://hosei-keiji.jp/cd/class/220428_01</a></li> </ul>

3.4④年間又は学期ごとの履修登録単位数の上限設定を行なっていますか。2018年度3.4④に対応

はい
【履修登録単位数の上限設定】※1年間又は学期ごと、学年ごと等に設定された履修単位の上限を記入。
<p>本学部では、ILAC科目と学部専門科目については、合計で半期30単位、年間48単位の履修を上限としている。</p>
【上限を超えて履修登録する場合の例外措置】※履修登録単位数の上限を超えて履修できる場合、制度の概要を記入。
<p>教職・資格科目に関しては、「教職資格課程表」あるいは「資格課程開設科目表」において、科目名に■が付いている科目は卒業所要単位には含まれず、これらを履修する場合は、ILAC科目および専門科目と合わせて半期30単位、年間60単位を上限として履修登録ができる。</p>
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・2022年度「キャリアデザイン学部履修の手引き」（履修登録が可能な単位数について）p.12 <a href="https://hosei-hondana.actibookone.com/">https://hosei-hondana.actibookone.com/</a></li> </ul>

3.4⑤教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。2021年度1.2④に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた
【具体的な科目名及び授業形態・内容等】※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・新入生向けの「基礎ゼミ」をはじめ、授業の多くでアクティブラーニングの要素を取り入れ、受け身の講義にとどまることなく、グループワークやディスカッション、プレゼンテーション等の機会をできるだけ多く設け、能動的な学習への取り組みを促している。</li> <li>・本学部では、「人の生き方＝キャリア」に主体的に関わっていくことができる人材の育成を旨としているため、キャリアをめぐる社会の様々な課題について具体的に理解する機会として、体験型科目群（「地域学習支援」「キャリアサポート実習」「メディアリテラシー実習」等）や「演習（ゼミ）」をはじめ、PBLを強く意識した授業を数多く展開している。</li> <li>・学部独自の制度として、毎年「学生活動サポートプログラム」と称する助成を行っており、主としてゼミ単位で、学外の様々な団体やコミュニティと協働しながら他者のキャリア形成の支援を実践する活動を推進している。</li> <li>・毎年1月末に、3・4年生を中心に学習の成果発表として「学生研究発表会」を開催し（4年生は参加必須）、アカデミックな形式に則ったプレゼンテーションを実践する機会を設けている。併せて「卒論要旨集」も作成し、学生たちの学び</li> </ul>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

<p>の成果を公開・共有している。2020年度に続いて2021年度もコロナ禍のためオンラインで発表会を実施したが、今後の開催形式については学生の反応も勘案しながら検討していく予定である。</p>
<p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>特になし</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<p>・「2022年度用体験型科目履修ガイダンス」資料                  ・学部掲示板「2022年度ゼミ履修の手引き」（「第16回学生研究発表会報告要旨集」〔2022年1月〕を含む）  <a href="https://hosei-keiji.jp/cd/class/220428_01">https://hosei-keiji.jp/cd/class/220428_01</a>                  ・法政大学キャリアデザイン学会紀要『生涯学習とキャリアデザイン』vol.18-2（2021年3月）所収、「学生活動サポート奨励金とその報告」  <a href="http://cdgakkai.ws.hosei.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2021/06/18-2-10.pdf">http://cdgakkai.ws.hosei.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2021/06/18-2-10.pdf</a></p>

3.4⑥それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。2021年度

1.2⑤に対応

<p>A： 従来通り効果的に取り組むことができた</p>
<p>※どのような配慮が行われているかを記入。</p>
<p>本学部においては、初年次教育の中心をなす「基礎ゼミ」（必修）、キャリア研究の基本的スキルを学ぶ「キャリア研究調査法（質的／量的）」（2年次選択必修）、実習を通して研究手法を身につける「キャリア研究調査法実習」等の科目は、1クラス20名程度の少人数に抑える代わりに複数コマを展開し、きめ細かな指導が行えるよう配慮している。また2年次以降に履修できる体験型科目群（選択必修）については、実習の受け入れ先の状況に即して各コースに10～50人弱の定員を設け、キャリアアドバイザーの協力も得つつ事前／事後指導の徹底を図ってきた。2021年度に該当科目や定員の見直しを行い、2023年度の新2年生から運用が開始される予定である。2年次秋学期から始まる「演習（ゼミ）」に関しては、応募者数の偏りを是正するために各ゼミ（各学年）11～12名程度を基準とし、三次募集まで設けることにより、できるだけ多くの学生に学習機会を提供するよう努めている。市ヶ谷基礎（ILAC）科目の必修英語については、2018年によりやく1クラス24人定員が実現したが、各クラスのレベルや授業内容の妥当性については引き続き検討を重ねていく必要がある。</p>
<p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>特になし</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<p>・「2022年度新入生ガイダンス」資料                  ・「2022年度用体験型科目履修ガイダンス」資料                  ・学部掲示板「2022年度ゼミ履修の手引き」  <a href="https://hosei-keiji.jp/cd/class/220428_01">https://hosei-keiji.jp/cd/class/220428_01</a>                  ・2020年度第14回教授会資料B-06「体験型ワーキング」（2021年2月26日）</p>

3.4⑦シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。2018年度3.4⑦に対応

はい

<p>【検証体制及び方法】※箇条書きで記入（取組例：執行部（〇〇委員会）による全シラバスチェック等）。</p>
<p>・毎年、シラバス執筆（依頼）開始の12月から翌年2月にかけて、教務委員会の各領域担当の教員が分担して、提出されたシラバスの形式と内容のチェックを綿密に行い、不備不足等があった場合は、執筆者に加筆修正を要請することにより、内容の適切性を確保している。</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<p>・「2021年度キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」（「シラバス入力チェック」の項目）</p>

3.4⑧授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。2018年度3.4⑧に対応

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

はい
<p>【検証体制及び方法】※箇条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・シラバスに記載されている内容は学生との一種の「契約」であり、厳密に守らねばならないことを、学部の FD ミーティング等を通じて絶えず周知徹底を図っている。</li> <li>・学生による授業改善アンケートや授業相互参観を通じて、シラバスに沿って授業が適切に行われているかどうかについて検証している。学期ごとの授業改善アンケートの結果については速やかに教授会で共有している。</li> <li>・学部の教育課程の中でも基幹的な科目に関しては、年三回の FD ミーティングにおいて、それぞれの授業担当者から内容や課題について報告がなされ、学部全体で議論を行っている。</li> </ul> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「2021 年度キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」（「授業評価アンケートの活用」「主要科目（講義系・体験型）」の各項目）</li> <li>・2021 年度第 1～3 回 FD ミーティング資料（2021 年 4 月 9 日、同年 9 月 17 日、2022 年 2 月 25 日開催）</li> </ul>

3.4⑨通常の教育課程や教育方法に加え、COVID-19 への対応・対策として、教育内容、教育方法、成績評価等の一連の教育活動において工夫を講じていますか。行っている場合はその内容と教育活動の効果についても教えてください。2021 年度

1.2⑥に対応

<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>2021 年度の学部の「年度目標」のうち、重点目標として「オンラインと対面の併用の中で、学生たちが不利益を被ることなく学修を進めることができるよう努める」を掲げ、学部を挙げて COVID-19 への対応を行ってきた。教務委員会の中に時限付で「オンライン担当委員」を主副 2 名置き、オンライン授業に関わる相談ごとやモニタリング調査を担当する拠点とした。同委員により、2019～2021 年の 3 年度分の履修データをもとに履修者行動の分析が試みられ、その結果と考察が教授会で共有された。また授業改善アンケートに、オンライン授業に関わる学部独自の質問項目を複数追加したことにより、学生の受講状況に関してより精密なモニタリングが可能となった。「基礎ゼミ」やキャリア研究調査法関連の授業など、多くの兼任教員を含む複数コマ展開の科目においては、対面授業の原則を貫き、クラス間で授業形態や成績評価に関して不平等が生じないように留意した。一方、学外での実習を主目的とする体験型科目群に関しては、現地での実習が遂行できたプログラムも一部あったものの、多くはオンラインと対面を臨機応変に組み合わせることで実習を行い、コロナ禍においても授業の質が保たれるような工夫がなされた。学外プログラムのうち「SA（スタディ・アブロード）」のみ完全中止となったが、2022 年度は滞在先を絞って再開される予定である。コロナ禍 3 年目に入り、オンラインと対面の併用における教育の質保証については一定の知見や経験が蓄積されたことから、2022 年度は先のオンライン担当委員の役目を解き、今後は学部としてオンラインというツールをどのように活用していくかについて、中長期的視点に立った検討を始めたところである。</p> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「2021 年度中期目標・年度目標達成状況報告書」（「教育課程・学修成果【教育方法に関すること】」の各項目）</li> <li>・「2021 年度キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」（「主要科目【講義系・体験型】」の各項目）</li> <li>・2022 年度第 1 回 FD ミーティング資料 F-01「2022 年度に向けて」（2022 年 4 月 8 日）</li> </ul>
---

3.5 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

3.5①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。2021 年度 1.3①に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

<p>【確認体制及び方法】※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・進級に関する規程、および早期卒業に関する規程を定めて公開している。</li> <li>・学部の平均 GPA については、執行部より教授会で提示され、その妥当性が検証されている。特に S（旧 A+）評価の扱いについては厳密化を図り、講義科目においては受講生の 15%以内に収めることを申し合わせている。</li> <li>・「基礎ゼミ」（必修）をはじめ複数コマ展開の科目においては、成績評価の基準にばらつきが出ないように、それぞれの科目担当責任の教員によって周知が図られている。</li> <li>・体験型科目群の各コースについては、単位認定に要する実習時間のばらつきを抑えるために、ある程度の共通ルールを設けた上で、細部については実習内容の多様性に鑑みて各担当教員の判断に委ねている。</li> </ul>
--

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
特になし
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・2022年度「キャリアデザイン学部履修の手引き」（「進級に関する規程」p.11、「早期卒業について」p.68） <a href="https://hosei-hondana.actibookone.com/">https://hosei-hondana.actibookone.com/</a></li> <li>・2021年度第1回FDミーティング資料「基礎ゼミ」（2021年4月9日）</li> <li>・2020年度第14回教授会資料B-06「体験型ワーキング」（2021年2月26日）</li> </ul>

3.5②厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。2021年度1.3②に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた
※取り組みの概要を記入。
<p>2013年度まで、学部主催科目の平均GPAが他学部に比べて相当に高くなっていたため、学部内で検討した結果、S（当時のA<sup>+</sup>）評価が多めに出されていることが明らかとなり、一定規模（受講生50名以上）の講義授業においては、S（旧A<sup>+</sup>）評価の割合を15%以内に収めることとし、GPAの偏りが是正された。また基礎ゼミ（必修）や体験型科目（選択必修）については、学部の主要科目であり、かつ少人数による演習ないし実習の形式による授業であることから、出席・遅刻等に関する厳格なルールを設け、成績評価および単位認定に反映させている。</p>
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
特になし
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・2021年度第1回FDミーティング資料「基礎ゼミ」（2021年4月9日）</li> <li>・2020年度第14回教授会資料B-06「体験型ワーキング」（2021年2月26日）</li> </ul>

3.5③学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。2021年度1.3③に対応

はい
【データの把握主体・把握方法、データの種類の等】※箇条書きで記入。
<p>学生の就職・進学状況については、毎年、キャリアセンターから提供される卒業生の進路データをもとに、学部の就職委員会を中心に実態を分析し、その結果を教授会で共有している。併せて、同委員会およびキャリアアドバイザーによる様々な就活支援プログラムの企画にも役立っている。毎年の進路データについては、学部のパンフレットを通じて公開している。</p>
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・2022年度「キャリアデザイン学部パンフレット」（「卒業後のキャリアデザイン」pp.21-22.） <a href="https://edu.career-tasu.jp/p/digital_pamph/frame.aspx?id=3942400-0-62">https://edu.career-tasu.jp/p/digital_pamph/frame.aspx?id=3942400-0-62</a></li> <li>・2021年度第1回FDミーティング資料「就職委員会」（2021年4月9日）</li> </ul>

3.6 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

3.6①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。2021年度1.4①に対応

はい
【データの把握主体・把握方法、データの種類の等】※箇条書きで記入。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・成績分布や進級の状況については、主に学部教授会において実態を把握・共有し、留級・卒業保留者および学業成績不振者については、キャリアアドバイザーによる個別面談を実施している。</li> <li>・面談による指導を徹底させるために、学生への呼びかけや督促の手順を明確化している。</li> <li>・選択必修の体験型科目については、前年に単位を取得することができなかった学生を翌年優先的に履修させるなど、取りこぼしの無いよう配慮している。</li> </ul>
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

- ・2022年度第1回FDミーティング資料F-18「キャリアアドバイザー制度運営委員会」（2022年4月8日）
- ・2022年度第1回教授会資料B-03「2022年度成績不振者面談の実施方法について」（2022年4月8日）

3.6②学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）に基づき、分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。2021年度1.4②に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

※取り組みの概要を記入。

2017年度に作成した「カリキュラム・マップ」において、「キャリアデザインが求められる社会的背景や歴史、現状などについて、専門的な深い知識を習得する」「キャリアデザインに関わる社会現象や政策・施策などについて、客観的に観察できる態度と能力を獲得する」など、学部の特性を反映した具体的な学習目標を8項目設定し、各々の科目が到達すべき目標を明確にすることにより、その達成の度合いに応じた成績評価を行っている。またほとんどのゼミにおいて、4年間の学びの集大成として卒業論文の執筆を義務づけているが、その質や量（2万字以上）が一定の水準を満たすよう、ゼミ担当教員による指導を徹底するとともに、「卒論要旨集」を作成して成果を共有している。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・キャリアデザイン学部ホームページ「カリキュラム」（「カリキュラム・マップ」のページを含む）  
<https://www.hosei.ac.jp/careerdesign/shokai/curriculum/>
- ・学部掲示板「卒業論文要旨集」  
[https://www.hosei.ac.jp/application/shibboleth\\_general/6616/4335/4065/220128\\_cd\\_youshi.pdf](https://www.hosei.ac.jp/application/shibboleth_general/6616/4335/4065/220128_cd_youshi.pdf)

3.6③学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）に基づき、具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。2021年度1.4③に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等。

体験型科目群の一部の科目において、学部で開発した効果測定法であるCATV（Career Action Vision Test）を用いて、体験学習の成果を検証している。他の体験型科目についても、成果報告書の作成や学内外でのポスター発表を通して、学びの成果を測ることができる仕組みを設けている。SA（スタディ・アブロード）では、例年、帰国後に英語によるプレゼンテーションを実施して成果を検証してきたが、2020年度に続き2021年度もコロナ禍のため渡航自体が中止された。毎年1月末に開催している「学生研究発表会」では、複数の教室を会場として、個人またはグループによる40件を超える研究発表が行われ、学生同士による質疑応答および教員の講評が行われる。2021年度は前年に続きコロナ禍のためオンラインでの開催となったが、複数のZoom会議室において円滑に発表が展開された。オンラインの方が参加しやすいという学生の声も聞かれることから、今後の開催形態については、学生活動サポート委員会を中心に多面的に検討していく予定である。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「2021年度キャリアサポート実習成果報告書」
- ・「2021年度キャリア体験学習報告書」
- ・「2021年度キャリア体験学習（国際）報告書」（ベトナム／台湾）
- ・「2021年度地域学習支援報告書」
- ・学部掲示板「第16回学生研究発表会報告要旨集」（2021年1月29日）  
[https://www.hosei.ac.jp/application/shibboleth\\_general/6616/4335/4065/220128\\_cd\\_youshi.pdf](https://www.hosei.ac.jp/application/shibboleth_general/6616/4335/4065/220128_cd_youshi.pdf)

3.6④学習成果を可視化していますか。2021年度1.4④に対応

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

A : 従来通り効果的に取り組むことができた
※取り組みの概要を記入。取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等
<p>学部のカリキュラムの重要な柱のひとつである体験型科目群においては、原則としてすべてのコースについて年度末に成果報告書を作成し、実習先をはじめ関係者に配布するとともに、学部専用のキャリア情報ルームにて閲覧できるようにしている。「キャリア体験学習（国際）」に関しては、今後ウェブ上でより広く公開することを検討しているが、2020年度に続き2021年度もコロナ禍によりイレギュラーな実習形態となったため、現在はペンディングの状態にある。同科目および「地域学習支援」のコースは、例年ポスター発表を行い、外部からのフィードバックが得られる仕組みを作っている。「キャリア体験学習C」コースでは、協働してプロジェクトを実施している外部企業に向けて成果報告会を開いている。一方、毎年1月末には、外部からの聴衆も交えて「学生研究発表会」を開催し、3・4年生を中心に、卒業論文や「学生活動サポート助成」による活動の成果などを発表する場を設けている。個々のゼミの枠を越えて、他の学生がどのような活動や研究を行っているのかを知り、様々な知的刺激を得ることができる貴重な機会となっている。発表会に合わせて、発表要旨および卒論要旨を掲載した冊子も作成して学部内に公開している。こうした学習成果の「見える化」は、教員たちにとっても、教育成果の向上に対する意識の涵養につながっている。</p>
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
特になし
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「2021年度キャリアサポート実習成果報告書」</li> <li>・「2021年度キャリア体験学習報告書」</li> <li>・「2021年度キャリア体験学習（国際）報告書」（ベトナム／台湾）</li> <li>・「2021年度地域学習支援報告書」</li> <li>・学部掲示板「第16回学生研究発表会報告要旨集」（2021年1月29日）</li> </ul> <p><a href="https://www.hosei.ac.jp/application/shibboleth_general/6616/4335/4065/220128_cd_youshi.pdf">https://www.hosei.ac.jp/application/shibboleth_general/6616/4335/4065/220128_cd_youshi.pdf</a></p>

3.7 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

3.7①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。2021年度1.5①に対応

S : さらに改善することができた
※検証体制及び方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。
<p>本学部では、授業の運営に関わる様々なことがらについては、教務委員会（教務担当の執行部主任を中心に、学部を構成する三領域の教員、英語担当教員、キャリアアドバイザー1名から成る）の主導のもとで、履修状況の確認や改善に向けての取り組みを実施している。教育課程や学習成果の検証に関しては、毎年年度末に、主だった科目ごとにそれぞれの担当教員が「キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検点検チェックシート」に年間の報告を記入し、学部自己点検・質保証委員会が客観的な観点からそれらの点検を行うとともに、FDミーティングにおいて内容を全教員が共有している。同委員会はまた、毎年秋学期に学生モニタリングによる調査も実施し、その結果を教授会にて報告している。2021年度は、入学時からコロナ禍にある2年生を対象として、学修や日常生活の状況について聞き取りを行った。こうした調査も踏まえ、コロナ終息後を見すえて、教育課程の改編に向けての作業に着手したところである。</p>
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
<p>本学部では、2007年、2012年に大幅な教育課程の改編を実施し、さらに2017年にも部分的な見直しを行った。学生を取り巻く近年の社会環境の変化に対応するために、2021年度より次の改編に向けての検討を開始したところである。議論に先立って、学生の学修環境や学びに関するニーズを把握するために、全学部生対象のアンケートを実施した。その結果も踏まえ、学部の三領域（発達・教育キャリア領域、ビジネスキャリア領域、ライフキャリア領域）から中堅の教員を中心に参加を募り、ワーキンググループによる議論を重ね、さらに教授会において全体でのディスカッションへと展開させている。この過程で、学生に身につけてほしい力を明確化するとともに、各々の科目の内容や学習の成果についての綿密な検証が始まったところである。より具体的には、基礎科目群、体験系科目群等、科目の特性にしたがって幾つかのワーキンググループに分かれ、それぞれにおいて徹底した検討が進められている。</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2021年度「キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」</li> <li>・2021年度第15回教授会資料B06-1「カリキュラムWG経過報告」（202年2月25日）</li> <li>・2021年度第15回教授会資料B06-2「カリキュラムWG学部調査概要」</li> </ul>
---

3.7②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。2021年度1.5②に対応

S： さらに改善することができた
<p>【利用方法】※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・例年、教育開発・学習支援センターから「学生による授業改善アンケート」の集計結果の提供を受けたのち、教授会においてその概要を執行部から説明するとともに、学部のグループウェアであるサイボウズ上でデータを共有し、各教員が具体的に授業改善に役立てていくよう促している。</li> <li>・2021年度は、第7回教授会（2021年9月17日）において、2020年度の「学生による授業改善アンケート調査全学集計結果」が報告され、授業活動に活用するようとのコメントがなされた。また第9回教授会（10月22日）において、2021年度春学期の「学生による授業改善アンケート調査全学集計結果」が報告され、一層の活用が促された。</li> <li>・2021年度には、「学生による授業改善アンケート」の共通項目について、5年に一度の質問項目見直しにかかる意見聴取もサイボウズ上で行われた。</li> </ul> <p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>2021年度に時限付で教務委員会内に特別に設けられたオンライン担当委員を中心に、コロナ禍における学生の学修について実情を把握するために、学部独自の質問項目の内容が検討され、新たに9問が「授業改善アンケート」に追加された。</p> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「2021年度キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」（「授業評価アンケートの活用〔春・秋学期〕」の項目）</li> </ul>

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
<p>本学部では、年三回のFDミーティングを通じて、教育課程・学修成果に関する総合的な検証を行っている。その際、初年次教育（「基礎ゼミ」、入門系科目、等）や体験型科目、演習（ゼミ）、さらには語学科目や資格関連科目（教職、司書、学芸員、等）まで、ほぼすべての主要科目を網羅した「キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」を作成し、それを土台として点検・改善の作業を実施している。毎年このサイクルを繰り返すことにより、学部教育に関するデータが蓄積されると同時に、時間の経過に伴って浮き彫りになってきた様々な課題を速やかに把握できるようになっている。その結果として、5～6年に一度、教育課程全体を見直し、大規模な改編を実施することに繋がっている。</p>

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
<p>上述したとおり、学部が開設している科目を対象とした教育課程・学修成果については、検証と改善のサイクルがおおむね確立している。しかしながらその一方で、近年、各種のサティフィケート・プログラムやデータ・サイエンス系のプログラム、グローバル・オープン科目など、学部の枠を越えた全学共通の学修プログラムが増加し、そのほとんどは「自由科目」に組み入れられている。学生がこれらのプログラムを積極的に受講することは望ましいが、学部の教育との効果的な両立や、学びの相乗効果の検証などについては、今後注視して検討していく必要があるだろう。</p>

【教育課程・学習成果の評価】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

**<①方針の設定に関すること (3.1~3.2) >**

キャリアデザイン学部では、学習成果およびその達成のための諸要件を明示した学位授与方針、学習成果を達成するための教育課程の編成・実施方針は従来から設定されており、周知、公表もされている。

教育課程の編成・実施方針が適切かどうかについては、年3回開催される学部内FDミーティングを通して確認、改善する方法が取られている。年度初めの第1回ミーティングではまず現状の確認を行い、年度途中の第2回ミーティングではそれらが適切か否かの議論を行い、そして第3回のミーティングでは、その年度の総括を行い、課題があれば洗い出し、次年度へとつなげる。このサイクルを繰り返しながら、問題点や課題を確認し、次年度へとつなげるやり方は注目に値する。

**<②教育課程・教育内容に関すること (3.3) >**

キャリアデザイン学部のカリキュラムは、自己のキャリアのデザインと他者のキャリアのデザインの支援を理念的な柱に、より具体的には発達・教育キャリア、ビジネスキャリア、ライフキャリアの3分野をカリキュラムツリーで示している。また、選択必修の体験型科目では専任教員47名が自分の専門領域に合ったプログラムを担当できるよう調整がなされ、学部生300名が必ずどこかのプログラムに参加をすることができている。民間企業、NPO、学校など、学外の諸機関と協力、連携しながら学生に現場体験、社会体験の機会を付与し、それを学内での勉強と結びつけようとしている点は非常に重要で、評価に値する。

この学部の大きな特徴は就職委員会や就職カフェを通して、キャリアアドバイザーが支援する体制が整えられていることであろう。学生支援としては特筆に値する。グローバル化への対応については外国語科目と外書講読が用意されている。ILACの外国語担当教員は一名しか配置されていないが、外国の大学を卒業した教員が多いことから、一般教養的な科目や専門科目も外国語で受講する機会を学生に提供し、グローバル化ニーズには応えられるような教育的努力がなされている。

**<③教育方法に関すること (3.4) >**

キャリアデザイン学部は新入生の履修指導は入学当初のガイダンス、キャリアアドバイザー、上級生によるピアサポーター等を活用してなされている。2年生以上の体験型科目や演習については履修ガイダンスを行い、学生が希望に添った履修ができるよう配慮されている。

学習指導も、新入生対象の基礎ゼミやキャリア研究調査法などを通してなされているが、英語教育に関して担当教員に多大な負担がかかっているという点については、改善が望まれる。履修単位数の管理は適切になされ、授業形態についてはアクティブラーニングやグループワーク、プレゼンテーションを取り入れている。またクラス編成では小規模学部の特長を生かし、実習では定員を10~50名に限定し、演習では11~12名程度を基準にするなど、少人数教育が目指されている。

COVID19関連では、オンライン担当委員2名が学生の相談にあたり、モニタリング調査も行うなど対応は適切である。

**<④学習成果・教育改善に関すること (3.5~3.7) >**

キャリアデザイン学部では、成績評価や単位認定は適正に行われている。就職・進学に関して設置されている学部独自の就職委員会やキャリアアドバイザーの制度は特筆に値する。キャリアアドバイザーは成績不振者への個別面談も行うなど、ケアをしっかりと行っている。学修成果については学部独自の8項目の目標を設定し、それを卒論につなげ、卒論要旨集で公表している。学習成果の把握では独自に開発した測定法(Career Action vision Test)に従ってなされている。授業改善アンケートについてもサイボウズ上でデータを共有し、各教員が授業改善に役立てられるようにしている。

課題として、グローバルオープン科目など、全学共通のプログラムが増えて、しかもそれらがほとんど自由科目に組み入れられていることから、学部教育との関連が曖昧になっている点が指摘されているが、これは全学共通の問題であり、大学全体で検討すべきことでもあろう。

**4 学生の受け入れ**

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

4.1①求める学生像や修得しておくべき知識等の内容・水準等を明らかにした学生の受け入れ方針を設定していますか。2018

年度4.1①に対応

はい

4.2 学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施してい

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた、B:改善することができなかった。」を意味する。

るか。

4.2①学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学選抜の制度や体制をどのように適切に整備していますか。また、入学選抜をどのように公正に実施していますか。【新規】

※取り組み概要を記入。

本学部では、学部の中期目標（2018～2021年）において、「入学センターと連携しながら、定員管理の適性化および入学者の質の向上に努める」を掲げ、毎年、学生募集の制度や入学選抜の体制を慎重にチェックしてきた。その過程で、自己推薦入試を専願化したり、英語外部試験利用の制度を導入したりするなど、様々な入試改革を行ってきた。また社会のグローバル化に対応して、国際性を具えた多様な学生を受け入れるために、外国人留学生の枠に加え、国際バカロレア利用自己推薦やグローバル体験公募推薦、海外高校や日本語学校の指定校推薦なども順次導入してきた。学生募集については、冊子体による学部パンフレットの作成や教員による出張授業等に加え、近年、ウェブを通じた情報伝達が著しく進展してきていることを受けて、広報委員会の主導のもと、学部紹介や各種学部イベントのYouTube動画をはじめ、ゼミ紹介動画や学部ツイッター等、学部ホームページ内のコンテンツをより充実させるよう努めている。併せて、学部パンフレットや学部紀要等もデジタル化してホームページに掲載することにより、受験生がより多くの情報により容易にアクセスできるよう配慮している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「2021年度中期目標・年度目標達成状況報告書」（「学生の受け入れ」の項目）
- ・2022年度第一回FDミーティング資料F-13「広報委員会」（2022年4月8日）
- ・キャリアデザイン学部ホームページ「キャリアデザイン学部で学びたい方へ」

<https://www.hosei.ac.jp/careerdesign/jukensei/>

4.3 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

4.3①定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。【2018年度4.2①に対応】

はい

※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。

毎年入学センターから提供される文部科学省定員や在学生数の超過率、未充足率等のデータを学部執行部が管理し、必要に応じて教授会で共有してきた。2016年に入学者が定員を大幅に超過し、急遽クラス増等の対応を行ったが、以後は順当に適切な在学者数を維持してきている。その一方で、少子化の進行に備えるために、現在は2年次からのみ実施している転編入の制度を3年次にも広げるなど、定員充足をより確実なものにしていくための議論を開始したところである。また、近年の入試合格者手続き率低下の傾向に対処するために、合格者との懇談会を企画するなど、受験生へのより丁寧なアプローチの方策も検討し始めている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「2021年度中期目標・年度目標達成状況報告書」（「学生の受け入れ」の項目）
- ・2022年度第一回FDミーティング資料F-16「学生サポート委員会」（2022年4月8日）
- ・2022年度第二回教授会資料B-01「2021年度実施入試の振り返り」（2022年4月22日）

4.4 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

4.4①学生募集および入学選抜の結果について定期的に検証を行い、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。【2018年度4.3①に対応】

S： さらに改善することができた

※検証体制及び検証方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。

本学部では毎年、入試選抜の終了後、入試形態ごとの定員、志願者、合格手続者の人数を一覧表に書き込んでいき、それらの経年変化がひと目で把握できるようにしている。この一覧表をもとに、一般入試および推薦・特別入試における募集人数の妥当性や倍率の推移等をチェックし、必要に応じて定員の調整や新たな入試形態の導入を行ってきた。併せて、入試経路別の学生の成績の平均を出すなど、入学後の学業の状況についても検証を重ねてきた。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

近年の課題として、推薦入試の大きな部分を占める指定校推薦に関して、少子化を見すえた適切な指定校数や高校ランクについての検討、指定校入学者の首都圏への偏りの是正、推薦学生の入学後の学業不振の傾向等が指摘されてきた。こうした課題に対処していくためには、毎年メンバーが入れ替わる学部入試委員会ではなく、長期的に検討・改善していくための仕組みが必要であるという認識のもと、まずは執行部主任のうちの1名が入試関連の諸改革に専従することとなった。この決定に基づいて、推薦学生の学業成績の追跡調査や他の入試形態による学生との比較検討、指定校入学者の地域分布等についての綿密な調査を開始し、現在、指定校選定基準や不芳レター発出の方針について新たな提案がなされつつある。また、執行部が交代しても課題に対する検討・改善の作業が滞りなく継承されるように、入試データのアーカイブ化も推し進められることとなった。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2022年度第一回教授会資料B-01「入試データのアーカイブ化・データベース化」（2022年4月8日）
- ・同資料B-02「指定校入試に関する提案」
- ・2022年度第二回教授会資料B-01「2021年度実施入試の振り返り」（2022年4月22日）

## (2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
<p>本学部では、自己および他者のより豊かで多彩なキャリア形成のあり方を探求することを目ざしているため、早くからJリーグ推薦入試や商業科公募入試、社会人入試など、多様な人材の確保を期して様々な入試形態を積極的に採用し、入学者の定員を十分に満たしてきた。とはいえ近年では、他学部や他大学においても入試形態の著しい多様化が進んでおり、学生募集において本学部の特色をより強力に打ち出すよう心がけている。</p>

## (3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
<p>本学部のような小規模学部において、一般入試に加えて多様な入試形態を適切に実施していくためには、書類審査や質問、採点、面接試験など、一人ひとりの教員が多大な業務を負わざるをえないことが近年問題となっている。その対応策として、たとえば指定校推薦の場合のように合否判定に直結しない面接については、個別面談からグループ面接に変更するなど、負担の軽減に向けての方策を検討し始めたところである。</p>

## 【学生の受け入れの評価】

キャリアデザイン学部では、自己推薦入試や英語外部試験利用入試、グローバル化に関連しては国際バカロレア利用自己推薦入試、グローバル体験公募推薦、日本語学校指定校推薦等で入試の多様化を図り、社会の多方面から入学者を選抜している。こうした入試の多様化はウェブ情報や学部教員による出張授業などで広報している。

2016年の入試では入学者が大幅な定員増になってしまったが、その後の適切な対応で正常化している。合格者の手続き率低下傾向に対処するために合格者との懇談会を企画していることは注目に値する。

学生募集や選抜については、入試経路別の学生の成績、推薦学生の成績のチェックを行い、首都圏への集中を避けるための方策についても検討するなど、適正化に向けて努力している。ただ、入試が多様化することから入試関連業務が増えて、教員負担が増し、問題として指摘されているが、これは多かれ少なかれ他の小規模学部にも共通することでもあり、対応が望まれる。

## 5 教員・教員組織

### (1) 点検・評価項目における現状

5.1 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

5.1①採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。2018年度5.1①に対応

はい
<p>【根拠資料】※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリアデザイン学部専任教員の任用に関する基準（教授会内規）</li> <li>・キャリアデザイン学部教授・准教授への昇格に関する基準（教授会内規）</li> <li>・キャリアデザイン学部任期付教員の任用に関する基準（教授会内規）</li> <li>・キャリアデザイン学部非常勤教員の任用に関する基準（教授会内規）</li> </ul>

5.1②組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在をどのように明示していますか。2018年度5.1②に対応

<p>【学部執行部の構成、学部内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教授会執行部4名（学部長1名、教授会主任1名、体験型科目担当主任1名、教授会副主任1名）：教授会の開催（原則として月2回開催、教授会に先立って執行部会議を複数回開催）を基盤として、学部運営に関わるすべてを統括する。</li> <li>・学部FDミーティング（定例年3回）：執行部の主導で開催され、学部運営と教学関連の双方における現状報告と課題の整理を行い、改善への道筋を組織的に検討する。</li> <li>・学部自己点検・質保証委員会：毎年、学部内の委員会活動や主要科目について、担当教員が記入した「キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」をもとに、その内容を点検してFDミーティングで報告する。併せて、各年度の「中期目標・年度目標達成状況報告書」（執行部作成）を点検し、達成状況の評価と改善のための提言を行う。</li> <li>・教務委員会：学生向けの各種ガイダンスの実施やシラバスのチェック、ゼミ選択の管理など、学生の履修に関わるすべてを担当する。</li> <li>・広報委員会：学部シンポジウムの開催や学部紀要の編集、学部ホームページの充実化など、対外的なことがらに関するすべてを担当する。</li> <li>・学生サポート委員会：学生研究発表会の開催や、学部独自の助成制度「学生活動サポートプログラム」の審査・点検など、授業以外の局面における学生への支援を担当する。</li> <li>・キャリアアドバイザー制度運営委員会：学部の専門スタッフであるキャリアアドバイザー（5名）が円滑に学習支援や就活支援を行える環境を整備する。</li> <li>・人事委員会（常設）：教員の年齢分布や専門性のバランス等を考慮し、執行部と協働して長期採用計画の策定に当たっている。また定年延長および更新に当たっての審査等を担当する。</li> </ul>
<p>【明示方法】※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・法政大学キャリアデザイン学部教授会規程</li> <li>・「2022年度キャリアデザイン学部各種委員」表</li> <li>・2021年度「キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」</li> <li>・2021年度「キャリアデザイン学部中期目標・年度目標達成状況報告書」</li> </ul>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・法政大学キャリアデザイン学部教授会規程</li> <li>・「2022年度キャリアデザイン学部各種委員」表</li> <li>・2021年度「キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」</li> <li>・2021年度「キャリアデザイン学部中期目標・年度目標達成状況報告書」</li> </ul>

5.2 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。

5.2①学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。2018年度5.2①に対応

はい
<p>※教員像及び教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性、国際性、男女比等の観点から教員組織の概要を記入。</p> <p>本学部の教育課程は、発達・教育キャリア、ビジネスキャリア、ライフキャリアの三領域からなっており、それぞれの領域における深い専門性を具備していると同時に、学際的な研究教育にも柔軟かつ創造的に対応できる教員像を明示している。教員組織の編成に当たっては、三領域のバランスが適切となるよう慎重に配慮されている。2022年現在、専任教員27</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

名、うち発達・教育キャリア 10 名、ビジネスキャリア 9 名、ライフキャリア 8 名となっており、男性教員 18 名に対して女性教員は 9 名となっている。全員日本国籍を持つが、多くは海外で博士の学位を取得している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・2022 年度用キャリアデザイン学部パンフレット

[https://edu.career-tasu.jp/p/digital\\_pamph/frame.aspx?id=3942400-0-11](https://edu.career-tasu.jp/p/digital_pamph/frame.aspx?id=3942400-0-11)

・キャリアデザイン学部ホームページ「教員紹介」

<https://www.hosei.ac.jp/careerdesign/kyoin/>

5.2②教員組織の編制において大学院教育との連携を考慮していますか。2018 年度 5.2②に対応

はい

※教員組織の編制において大学院教育との連携にあたりどのようなことが考慮されているか概要を記入。

キャリアデザイン学研究科は、2013 年度に大学院経営学研究科キャリアデザイン学専攻から独立して現在に至っている。社会人大学院であることから、学部の学生との交流は殆どないが、学部教員の半数強が大学院教育を兼務している。小規模学部の限られた人的資源の中で、大学院入試や修士論文指導など、大学院の運営に多大なエネルギーを注ぎざるを得ない状況にあり、学部教育と大学院教育のバランスをどう取るかが常に課題となっている。学部教授会においては、原則として毎回、大学院研究科長から大学院関係事項が報告され、学部の全教員が大学院の現状を理解し、連携の土台を築けるよう配慮している。また、学部教育と大学院教育の連続性や協働の可能性についてより具体的に検討するために、代々の学部執行部と大学院執行部とのあいだで懇談の機会を設けている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

学部ホームページ「キャリアデザイン学研究科」

<https://www.hosei.ac.jp/gs/careerdesign/>

5.2③特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。2018 年度 5.2③に対応

はい

【特記事項】※ない場合は「特になし」と記入。

学部の人事委員会（常設）が、執行部と協働しつつ、教員の年齢分布を考慮に入れた長期採用計画の策定に当たっている。また新任教員の採用人事の際には、専門性に基づいてその都度新たに立ち上げられる人事委員会を中心に、年齢バランスを適切化することに配慮した選考・採用が行われている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・2022 年度第一回 FD ミーティング資料 F-20 「人事委員会（常設）」（2022 年 4 月 8 日）

5.3 教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。

5.3①各種規程は整備されていますか。2018 年度 5.3①に対応

はい

【根拠資料】※教員の募集・任免・昇格に関する規程・内規等の名称を簡条書きで記入。

- ・キャリアデザイン学部専任教員の任用に関する基準（教授会内規）
- ・キャリアデザイン学部教授・准教授への昇格に関する基準（教授会内規）
- ・キャリアデザイン学部任期付教員の任用に関する基準（教授会内規）
- ・キャリアデザイン学部非常勤教員の任用に関する基準（教授会内規）

5.3②規程の運用は適切に行われていますか。2018 年度 5.3②に対応

はい

【募集・任免・昇格のプロセス】※簡条書きで記入。「上記根拠資料の通り」と記載し、内規等（非公開）を添付することも可。

・専任教員の募集は、学部教育において必要とされる専門性や、担当予定の科目内容、学部運営の業務等を明示し、原則として公募で行われている。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

・専任教員の採用や昇格の人事は、学部教授会と研究科教授会が定めた内規に基づき、厳格な審査を経て実施されている。

5.4 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

5.4①学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。2021年度2.1①に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

- ・年3回（年度はじめ、秋学期開始時、年度末）、執行部が招集し、サバティカル中を除く全専任教員、キャリアアドバイザー、学務主任が参加するFDミーティングを開催している。
- ・内部自己点検・質保証委員会（各領域から1名ずつの教員で構成）が、執行部とは独立したかたちで第三者的に学部運営について点検・評価を行い、適宜改善策の提案を行っている。
- ・毎月開催される教務委員会（教務担当の執行部主任、各領域から1名ずつの教員、英語担当教員、キャリアアドバイザー、学務事務1名で構成）が、年間を通じて授業や学生の履修に関わるFDを実施している。

【2021年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。

- ・年度はじめ（2021年4月8日、オンラインのZoom会議、28名参加）、秋学期開始時（9月17日、大内山校舎内キャリア情報ルーム、27名参加）、年度末（2022年2月25日、キャリア情報ルーム、27名参加）の合計3回、FDミーティングを開催。各回、学部長による学部の現状や課題についての総括に続き、①カリキュラム関係、②学部内各種委員会、の2部構成で、配布資料をもとに、それぞれの代表担当教員から報告がなされ、情報共有と意見交換を行った。
- ・主要科目（基礎ゼミ、入門系科目、体験型科目、調査法関連科目、語学、演習、等）や、学部内の主な活動（学部シンポジウム、法政大学キャリアデザイン学会研究会、キャリアアドバイザーによる学生支援、等）について、年度末に「内部質保証・自己点検チェックシート」に各担当教員が記入し、年間の振り返りを行った。
- ・上記チェックシートをもとに、執行部および各担当教員が「2021年度中期目標・年度目標達成状況報告書」において自己評価を行い、その結果について内部自己点検・質保証委員会が達成状況を確認・評価し、併せて改善のための提言を第3回FDミーティングの場で行った。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2021年度第1～3回FDミーティング資料および同日開催の教授会議事録
- ・「2021年度キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」
- ・「2021年度中期目標・年度目標達成状況報告書」

5.4②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。2021年度2.1②に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

※取り組みの概要を記入。

- ・本学部の研究や教育における重要なテーマのひとつが他者のキャリア形成の支援であることから、学部内ではピアサポーターの育成を積極的に推し進めるとともに、体験型科目や多くの演習（ゼミ）において、学外の小学校～高校、民間企業、NPO、文化施設等、社会の様々な組織やコミュニティと連携してフィールド活動を展開し、その成果を報告書の形で公表している。
- ・キャリアデザイン研究を推進するために、法政大学キャリアデザイン学会が年6回の研究会を主催し、外部にも広く公開してアカデミックな研究成果の社会還元を図っている。
- ・法政大学キャリアデザイン学会による「研究プロジェクト助成」事業を通して、複数の教員がチームで協働して研究を実施する支援を行っている（年20万円、3年間継続）。
- ・学部紀要を年1回、法政大学キャリアデザイン学会紀要を年2回発行している。いずれもデジタル化してホームページ上で公開し、研究の成果を広く社会に発信している。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・法政大学キャリアデザイン学会ホームページ（「学部紀要」「学会紀要」「研究会実績一覧」のページを含む）  
<http://cdgakkai.ws.hosei.ac.jp/wp/>
- ・法政大学キャリアデザイン学会「研究助成申請要綱」

## （2）長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
小規模学部ゆえの利点を生かし、教授会やFDミーティングにおける議論や合意形成、グループウェア（サイボウズ）上での情報共有等が比較的容易に行われ、FD活動におけるPDCAサイクルも円滑に展開されている。この間のコロナ禍で生じた様々な教学関連の課題に対しても、速やかに対応することができた。

## （3）課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
限られた人的資源を最大限に活用して学部および大学院の運営に当たっているが、マンパワーの限界に達しつつある。2021年度より、学部内の各種委員会の人員構成を大幅に見直し、制度のスリム化を図っている。また、教授会をはじめ各種委員会の開催に当たっては、可能な限りオンラインを活用するとともに、サイボウズを通しての議論や情報共有のスピードをアップし、業務のさらなる効率化を図ることとしたい。

## 【教員・教員組織の評価】

キャリアデザイン学部では、学部FDミーティングや学部自己点検・質保証委員会、学生サポート委員会やキャリアアドバイザー制度運営委員会等を常設して、全員の体勢で学部運営に取り組んでいる。

学部内3領域の教員については、それぞれ10名、9名、8名と3分野のバランスも良く、また、教員の男女比が18名対9名と、日本の大学の現状からすると男女のバランスも良く取れている。

FD活動にも積極的で、FDミーティングや自己点検・質保証委員会、教務委員会などは定期的、あるいは頻繁に開催され、その情報は教授会で共有されている。また、研究活動や社会貢献活動も活発で、キャリアデザイン学会が主催する研究会は公開するなど、その姿勢は評価に値する。

しかし、小規模学部として教員への負担はかなり大きく「マンパワーの限界に達しつつある」というのは深刻で、これへの早急な対応が望まれる。

## 6 学生支援

### （1）点検・評価項目における現状

6.1 学生支援に関する大学としての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。

6.1①卒業・卒業保留・留年者及び休・退学者の状況を学部（学科）単位で把握していますか。2018年度6.1①に対応

はい
【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】※箇条書きで記入。
・事務主任からの情報提供に基づき、学籍移動(卒業保留・休退学者等)に関しては学部として継続的に把握し、教授会において共有している。
・退学者については、退学理由によっては執行部が面談を行う体制を取り、留年者・卒業保留者・低単位取得者等に対しては、キャリアアドバイザーによる個別面談を実施している。該当する学生を確実に面談に繋げ、支援の効果を上げるために、支援のフローを細かく定めている。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

- ・「2021年度キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」（「アドバイザーによる学生支援」の項目）
- ・2022年度第1回FDミーティング資料F-18「キャリアアドバイザー制度運営委員会」（2022年4月8日）
- ・2022年度第一回教授会資料B-03「成績不振者面談の実施方法について」（2022年4月8日）

6.1②学部（学科）として学生の修学支援をどのように行っていますか。2018年度6.1②に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

※修学支援の取り組みの概要を記入（取り組み例：クラス担任、オフィスアワー、学生の能力に応じた補習・補充教育、アカデミックアドバイザーなど）。

新入生に対しては毎年4月1日に新入生ガイダンスを行い、高校から大学への学びの移行が円滑に行われるよう指導している。また初年次教育に相当する「基礎ゼミ」（必修）では、大学での学びに必要なアカデミック・スキルの習得に加え、学生生活に関する多面的なガイダンスも行われている。1クラス20名程度の少人数で実施されるため、ホームルーム的な役割を果たしている。2年次以上においては、体験型科目（選択必修）やゼミ選択のためのガイダンスを開催し、学生の希望に叶う履修が行えるよう支援している。2年次の秋学期以降は、学生が所属するゼミにおいて、教員がクラス担任としての役割を担いつつ、卒業までの修学支援を継続的に行っている。授業外の修学支援としては、学部の専任・兼任教員ともにオフィスアワーを1時限（100分）程度設け、学生の相談や指導に当たっている。本学部には、教員に加えて専門スタッフのキャリアアドバイザー5名が配置されており、学生の求めに応じて随時学習支援や進路相談等に応じている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「2021年度キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」（「アドバイザーによる学生支援」の項目）
- ・2022年度第1回FDミーティング資料F-18「キャリアアドバイザー制度運営委員会」（2022年4月8日）

6.1③成績が不振な学生に対し適切に対応していますか。2018年度6.1③に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

【成績不振学生への対応体制及び対応内容】※箇条書きで記入。

・全学で定められている成績不振者に加え、本学部独自の取り組みとして、留級者に対してもキャリアアドバイザーによる面談を実施し、適切な支援を行っている。また、ゼミを履修していない一部の学生が取りこぼされることのないよう、やはりキャリアアドバイザーによる面談を通じて支援を行っている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「2021年度キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」（「アドバイザーによる学生支援」の項目）
- ・2022年度第1回FDミーティング資料F-18「キャリアアドバイザー制度運営委員会」（2022年4月8日）
- ・2022年度第一回教授会資料B-03「成績不振者面談の実施方法について」（2022年4月8日）

6.1④学部（学科）として外国人留学生の修学支援について適切に対応していますか。2018年度6.1④に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

※外国人留学生の修学支援に関する取り組みの概要を記入。

外国人留学生に対しては、学部の国際交流委員会を中心に、グローバル教育センターとも密に連携しながら学習支援に当たっている。2021年度には留学生へのアンケートを実施し、彼らの状況の把握に努めた。また一部の参加にとどまったものの、ズームを用いて交流会を行った。今後は執行部も協力し、学部独自の支援を強化していくことにしている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

- ・2021年度「中期目標・年度目標達成状況報告書」（「学生支援②」の項目）
- ・2022年度第1回FDミーティング資料F-14「国際交流委員会」（2022年4月8日）

6.1⑤学部（学科）として学生の生活相談に組織的に対応していますか。2018年度6.1⑤に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

※学生の生活相談に関する取り組みの概要を記入。

学生の生活相談に関しては、1年次であれば前述の「基礎ゼミ」、2年次以降であれば専門演習（ゼミ）において、組織的・継続的な対応が取れるような体制を整えている。また、生活相談の中でも特に繊細な配慮が必要な社会・心理面（人間関係やメンタルの問題）に対する相談やケアが必要な場合は、学部のキャリアアドバイザーが個別に対応するとともに、必要に応じて大学の学生相談室へのリファーを行える仕組みを用意している。生活相談における教員の対応スキルの向上のために、全学の教員を対象とした学生相談室主催の研修等への積極的な参加を促している。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「2021年度キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」（「アドバイザーによる学生支援」の項目）
- ・2022年度第1回FDミーティング資料F-18「キャリアアドバイザー制度運営委員会」（2022年4月8日）

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

本学部には独自のキャリアアドバイザー制度があり、5名のアドバイザーが学生の修学支援や生活相談等のサポートに当たっている。それによって、教職員だけでは対応が難しいケースについてもきめ細かく対処できる体制が整っている。とはいえ、キャリアアドバイザーは5年任期で絶えず入れ替えがあり、また臨床心理士といった特定の資格を有することを必須とはしていないため、得意とする支援の分野に偏りが生じることもありうる。今後はさらに、適切な人材の任用と本制度のより効果的な活用のあり方を検討していくこととしたい。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

近年、従来の留学生入試に加えて海外指定校や日本語学校からの入学者など、外国人留学生が益々増える傾向にある。入学後の学業成績の追跡調査も含め、留学生への対応をよりきめ細かく行い、支援を強化していくことを検討したい。

【学生支援の評価】

キャリアデザイン学部の学生の成績、進級、卒業等をめぐる問題への対処においては、5名のスタッフで構成される学部独自の常設キャリアアドバイザーの役割が大きい。その活動を通して成績不振者や留級・留年者等への対応が首尾良くなされている。

新入生に対しては入学当初のガイダンスや基礎ゼミを通して、2年生以上の体験型科目や演習でもガイダンスを準備し、学生の修学支援を行っている。留学生については、グローバル教育センターと連携しながら、アンケートを実施して状況把握を行い、支援に努めている様子がかがえる。

7 教育研究等環境

(1) 点検・評価項目における現状

7.1 教育研究を支援する環境や条件を適切に整備し、教育研究活動の促進を図っているか。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

7.1①ティーチング・アシスタント (TA)、リサーチ・アシスタント (RA)、技術スタッフ、授業支援アシスタント、ラーニングサポーター等を配置することによる、教員の教育研究活動を支援する体制は整備されていますか。2018 年度 7.1①に

対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

※教育研究支援体制の概要を記入。

大規模修業における学生の管理や、ハイフレックス授業における機器類のセッティング準備などのために、必要に応じて学生アシスタントの制度を活用している。また、本学部の柱のひとつである体験型授業群（選択必修）の実施に際しては、学生の実習先として学外の様々な機関と連携したり、国内外の企業でのインターンシップの調整を行ったりするなど、細やかかつ継続的な対応が不可欠であるため、学部独自のスタッフであるキャリアアドバイザー5名が分担してそれぞれのコースの支援に当たり、円滑な授業運営に繋がっている。また、学部専用の教室・施設として、「キャリア情報ルーム」（大内山校舎3階）、「キャリア・アクティブラーニング・スタジオ（CALS）」（BT12階）が設置されており、キャリアに関する各種資料の閲覧や、学生によるグループ活動、マルチメディア教材を使用した学習等のスペースとして活用されている。

【2021 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・キャリアデザイン学部「キャリアアドバイザーに関する規程」
- ・「2021 年度キャリアデザイン学部内部質保証・自己点検チェックシート」（「アドバイザーによる学生支援」の項目）
- ・2022 年度第1回FDミーティング資料F-18「キャリアアドバイザー制度運営委員会」（2022年4月8日）

7.1②学部（学科）として、学生の学習環境や教員の教育研究環境の整備に関して、COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。新規

※取り組みの概要を記入。

感染症対策のレベルに応じて、対面/オンラインで実施する授業についてのガイドラインを予め定め、兼任教員や学生に周知することによって混乱が生じないように配慮している。また実習を伴う科目が多いため、学外に出かける際にはその都度学部届け出を提出することを義務づけ、学生の行動範囲を把握している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2021 年度「中期目標・年度目標達成状況報告書」（「教育課程・学修成果【教育方法に関すること】①②」の項目）

### (2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

#### 内容

学部独自のキャリアアドバイザー制度により、5名のスタッフ（5年任期）が学生の学びと成長をサポートする役割を担っており、授業支援はもとより、学生生活全般や就職に関する相談にも応じるとともに、毎年、様々なイベントやセミナーも企画・実施している。こうした活動の内容や質を担保するために、キャリアアドバイザー制度運営委員会が年間を通じて管理・点検・改善に当たっている。キャリアアドバイザーはFDミーティングにも出席して活動報告を行うことにより、教授会全体で現状や課題を共有している。

### (3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

#### 内容

キャリアアドバイザーは5年任期のため、学部内における様々な活動の蓄積がうまく引き継がれず、途切れてしまう可能性がある。また、各々のアドバイザーの専門性が多様なため、支援の対象領域や活動内容の適性について常に検証して

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

いく必要がある。今後もキャリアアドバイザー制度運営委員会を中心に、アドバイザーがより効果的に支援を行えるような仕組みや環境を整備していくことが求められる。

**【教育研究等環境の評価】**

キャリアデザイン学部では、大規模授業についてはティーチング・アシスタント（TA）がうまく活用されている。いろいろな準備が必要な体験型授業については、相手方機関との調整など時間がかかることも多い。これについては5人いるキャリアアドバイザーが分担して担当教員や学生の支援を行っており、また、学部独自のキャリア情報ルームやキャリア・アクティブラーニングスタジオも活用されている。

体験型授業の実施にとってCOVID19は大きな障害となった。実施に当たっては相手方機関の意向も尊重し、かつ、実施する場合は学部への届出を義務化するなどして行動を把握し、万が一の事態に対応できる体制を整えて実施している。

課題として挙げられているキャリアアドバイザーの引き継ぎ問題であるが、この学部の行動力をもってすればそれほど難しいとも考えられない。今後の対応に期待したい。

**8 社会貢献・社会連携**

(1) 点検・評価項目における現状

8.1 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか。また教育研究成果等を適切に社会に還元しているか。

8.1①学外組織との連携協力による教育研究の推進に関する取り組み及び社会貢献活動を行っていますか。2018年度 8.1①に  
対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

※取り組み概要を記入。

本学部では、他者のキャリア形成の支援を行える人材の育成を目標のひとつに掲げており、NPOや文化施設、学校、民間企業等、学外の多様な組織との連携協力による教育研究に積極的に取り組んできた。カリキュラムの軸のひとつである体験型科目において、半期の事前指導を受けたのち、すべての学生が様々な現場で体験を通してキャリアデザインを学ぶことができるのも、こうした連携協力によるものである。また、2年次秋学期から始まるゼミ（専門演習）の多くでも、例えば地方の山間地域の高校において、高大連携のキャリア教育や地域づくりの支援を行ったり、東北の被災地の小中高等学校に対する教育支援活動を実施したり、地域の産業振興のために新たなプロジェクトを立ち上げるなど、それぞれのゼミの専門性を生かして多彩な連携・貢献活動を展開している。学部独自の助成制度である「学生活動サポートプログラム」においても、学外の様々な団体やコミュニティと協働しつつ、学生が主体となって他者のキャリア支援を実践している。2021年度はコロナ禍により、学外組織との連携や社会貢献活動の多くがオンラインを通じてのものにならざるを得なかったが、国内外の多様な団体との交流のノウハウが蓄積されることとなった。今後もオンラインというツールの持つ特性を生かして、新たな提携協力の可能性を探っていく予定である。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「2021年度キャリアサポート実習成果報告書」
- ・「2021年度キャリア体験学習報告書」
- ・「2021年度キャリア体験学習（国際）報告書」（ベトナム・台湾）
- ・「2021年度地域学習支援報告書」

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

本学部では、体験型授業やゼミ活動をはじめとして、学外の様々な組織や自治体と連携しながら学習支援、教育支援、キャリア教育支援等を行う機会が豊富に用意されている。また近年は、キャリアデザインに対する関心やキャリア支援の

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

ニーズの高まりに呼応して、教員の専門性に対する社会的要請が一段と大きくなり、厚生労働省や経済産業省、東京都をはじめとする自治体、一般・公益社団法人等からの依頼を受けて、審議会委員や専門委員、団体等の役員、研修講師などを務めている教員が数多くいることも本学部の大きな特徴といえる。

**(3) 課題・問題点**

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
<p>上述したように本学部では、学外において多様な社会連携・社会貢献を展開しているが、各々の活動が個別に実施され、その実態や成果が学部に十分に伝わっていない部分も小さくない。今後は、活動のさらなる充実とともに、学部全体で情報を共有し、さらには広く学外に発信していく仕組みを整えていくことが必要である。</p>

**【社会貢献・社会連携の評価】**

キャリアデザイン学部の学部運営におけるこの学部の特徴の1つは、体験型授業を通してNPOや文化施設、民間企業など、学外団体との連携に積極的なことである。しかもその活動や体験、そこから得られる学びを授業を通して学生も共有できるカリキュラムを作り、実施している。さらに、それを問題を多く抱える地方の山間地域や東北の被災地で実施することで、日本の社会が抱えている現実的な問題に学生の目が行くよう、よく考えられている。

社会連携で得られた「成果が学部に十分に伝わっていない部分も小さくない」点が課題として挙げられているが、体験型授業の成果は小冊子や学部HPで手短かに公表するだけでも目的の多くは十分共有できるのではないだろうか。今後の対応に期待したい。

**9 大学運営・財務**

**(1) 点検・評価項目における現状**

- 9.1 方針に基づき、学長をはじめとする所要の職を置き、教授会等の組織を設け、これらの権限等を明示しているか。また、それに基づいた適切な大学運営を行っているか。
- 9.1①教授会等の権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。 2018年度9.1①に対応

はい
<p>※概要を記入。</p> <p>本学部では、教授会規程をはじめ、学部運営に関する各種規程・内規等を整備し、必要に応じて内容や文言の見直しを行いつつ、規程に厳格に則った運営を行っている。教授会は執行部（学部長、教授会主任、教授会副主任、体験型主任、事務主任）の主導のもとで開催される。予め執行部会議において、教授会に向けて必要な報告・審議事項を整理するとともに、各教員および各委員会からも議題を募り、円滑かつ適切な教授会の運営が行われるよう努めている。学部内委員会は現在13委員会が置かれており、それぞれの委員長のイニシアチブのもとで適切な運営がなされている。</p> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリアデザイン学部教授会規程</li> <li>・「2022年度キャリアデザイン学部各種委員」一覧</li> </ul>

**(2) 長所・特色**

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させるために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
<p>毎回の教授会資料および議事録は、サイボウズのファイル管理の中に順次収められ、必要に応じて過去の情報を容易に参照することが可能となっている。それによって、執行部が交代しても学部運営に関わる様々な情報が確実に継承される仕組みが整っている。</p>

**(3) 課題・問題点**

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
小規模学部ゆえに各々の教員の業務負担がともすれば増大しがちであり、教授会や各種委員会における運営の効率化の要請が高まっている。ひとつの方策としてオンライン化を推し進めているが、いまだ過渡期の状態にある。今後も学部運営の効率化や業務の平準化に向けて検討を続けていくこととしたい。

【大学運営・財務の評価】

キャリアデザイン学部では、学部内委員会が13あり、学部運営はかなり緻密になされていると推測できる。 また、教授会資料や議事録は学部内でファイル管理され、教授会メンバーがいつでも閲覧できる体制が取られていることは、教授会のスムーズかつ効率的な運営にとっても重要である。 業務負担の増大への解決策としてオンラインの活用が検討されているが、問題は何をどこまでオンライン化するかだと思われる。これはトライアンドエラーを繰り返し、その経過を見ながら進めることになるだろうが、それは他の学部、他大学にも共通することであろうと思われる。
---

III 2021年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
1	中期目標	2017年度から実施している教育課程の効果を検証し、必要に応じてカリキュラム内容の検討を行う。	
	年度目標	①2019年度より日本語教育関連の科目に代って設置された「キャリア研究調査法実習」(計6コマ)の円滑な実施を図る。	
	達成指標	20年度に開講曜日・時限の見直しを行い、全体の受講者数は増加したが、依然として10人未満のクラスが2コマあるため、全クラスでの充足を旨とする。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	B
		理由	2020年度は春学期2コマ、秋学期4コマと配分を見直し、開講曜日・時間帯の見直しもを行い、受講生の増加がみられた。そこで、2021年度は前年度のやり方を踏襲して実施した。休講が1コマあったことやコロナ禍が影響して受講者が伸びなかったこともあり、2020年度の受講生が106名であったのに対し2021年度の受講生は49名となった。また、3コマのクラスで受講者が10人未満であった。
		改善策	受講者の少ないコマを中心に、引き続き、受講状況を見ながら時間割編成を含め、検討を加えていく。一方で、「キャリア研究調査法実習」の今後の在り方については、カリキュラム改革のなかで研究調査法全体の枠組みの変更を含め抜本的な検討を加えていく。
質保証委員会による点検・評価			
	所見	左記の理由と自己評価に賛同する。	
	改善のための提言	左記の改善案に賛同するとともに、発達教育領域で来年度になされているように、授業内容の変更(学生の関心やレベルにより合致するよう)を試みるという方法もある。	
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
2	中期目標	2017年度から実施している教育課程の効果を検証し、必要に応じてカリキュラム内容の検討を行う。	
	年度目標	②2018年度から開始された「キャリア体験学習(国際・台湾)」の担当教員が2020年度より交代したため、プログラムが滞りなく実施されるよう努める。	
	達成指標	2020年度より新たな担当教員のもとでプログラムが実施されているが、引き続き体験型主任および国際交流委員会とも連携しながら確実な授業展開を図る。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
自己評価		A	
	理由	新型コロナ対応のため台湾での現地学習はできなかったが、体験型主任や国際交流委員会	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた、B:改善することができなかった。」を意味する。

			と連携しつつ、台湾とオンラインでつないだ講演会、学生交流、企業訪問を行い、国内での台湾関係機関等へのフィールドワークを実施した。	
		改善策	台湾とオンラインでつなぐ交流活動や国内でのフィールドワークのさらなる充実を図る。2021 年度に交流を始めた横浜中華学院への学校訪問をさらに工夫する。また、秋学期において短期の台湾での体験学習を実現する可能性を探る。	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	左記の理由と自己評価に賛同する。	
		改善のための提言	左記の改善案に賛同する。	
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】		
3	中期目標	2017 年度から実施している教育課程の効果を検証し、必要に応じてカリキュラム内容の検討を行う。		
	年度目標	③2019 年度に「情報処理演習」の開講コマ数を見直した成果について、引き続き観察して改善に努める。		
	達成指標	2020 年度にコマ数を 8 から 4 に集約し、10 人未満のクラスは 1 コマに減ったが、データサイエンスの重要性が高まるなかで、授業内容の適否についても ILAC や教務委員会と検討を進めていく。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	B	
		理由	2021 年度に開講した 4 クラスの履修者平均値は 8 人、同合計値は 32 人であり、履修者過小の状態が依然として継続している。	
		改善策	二つの原因が考えられる。第一に、授業内容は MS-Office の操作方法に重点が置かれているが、学生のニーズと乖離している懸念がある。第二に、本科目は 1、2 年次に履修するケースが多いが、ILAC 科目に含まれており、履修者側の目に留まりにくいかもしれない。これらの点を、現在進行中のカリキュラム改革ワーキンググループにて検討する。	
		質保証委員会による点検・評価		
所見		左記の理由と自己評価に賛同するとともに、過少受講者の理由としては、教職志望者の履修が少なくないことが挙げられよう（教職志望者数は景気循環の影響が小さくない）。		
改善のための提言	左記の改善案に賛同するとともに、教職ガイダンスでのアナウンスも考えられよう。			
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】		
4	中期目標	2017 年度から実施している教育課程の効果を検証し、必要に応じてカリキュラム内容の検討を行う。		
	年度目標	④必修英語および選択英語・学部専門科目としての英語の授業における、質の担保と履修者増を図る。		
	達成指標	2021 年度より ILAC 英語分科会の体制変更に伴い、学部の英語担当教員のイニシアチブが高まることを生かして、よりきめ細かな学修のサポートに当たる。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	本学部専任教員の福井が ILAC 英語分科会の科目責任者、カリキュラム・モニター委員、学部担当委員・時間割り担当を務めるなど、ILAC において本学部の意見を反映する体制は整った。ただし、選択英語科目の履修者が少ない状態は続いている。	
		改善策	学部の英語担当専任教員と協議しつつ、選択科目については、ILAC の科目スリム化に関連して一部を ERP やグローバルオープン科目で代替させる可能性を、また学部科目の国際コミュニケーション語学に関しても、こうした全学公開科目の履修を促すことでスリム化の対象とすることを検討している。	
		質保証委員会による点検・評価		

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S」：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

	所見	左記の理由と自己評価に賛同する。
	改善のための提言	左記の改善案に賛同する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
5	中期目標	100分授業の教育効果を高めるための教育方法について検討する。
	年度目標	①オンラインと対面の併用の中で、学生たちが不利益を被ることなく学修を進めることができるよう努める。
	達成指標	教務委員会の中に新たに設置した「オンライン担当委員」を中心に、執行部とも連携しつつ受講状況のモニタリングや困りごとの把握・対応に当たる。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	教務委員会内に設置された「オンライン担当委員」が、2019年・2020年・2021年の3年度分の履修データをもとに、オンラインか対面かについて履修者行動を分析した。こうした客観的なデータに基づく分析結果が第4回教授会（6月4日）で共有され、意見交換が行われた。さらに「オンライン担当委員」を中心に、春学期の授業改善アンケートの調査に学部独自の項目（9問）が検討され、追加されたことにより、受講状況のより精緻なモニタリングが可能となった。
	改善策	（コロナ禍に伴う授業のオンライン化に伴って時限的に配置された「オンライン担当委員」は左記により一定の役割を果たしたことから、次年度は特別な配置を収束する。）
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	左記の理由と自己評価に賛同する。
	改善のための提言	左記の改善案に賛同する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
6	中期目標	100分授業の教育効果を高めるための教育方法について検討する。
	年度目標	②コロナ禍における体験型科目（キャリア体験学習、地域学習支援、キャリアサポート実習等）が、感染防止に配慮したうえで、十分な学修の成果を上げられるよう努める。
	達成指標	体験型主任を中心に、授業の実施状況を把握し、適宜教授会やFDミーティングで共有するとともに必要に応じて改善策を検討する。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	普段からの授業領域内、領域間のコミュニケーションに加え、体験型科目全体としては学期毎に授業実施上の課題や工夫を調査し、課題については個別ヒアリングによって対応策を協議し、工夫についてはFDミーティングなどで共有した。
	改善策	完全オンラインについては教員・学生ともにノウハウの蓄積・インフラ整備により滞りなく実施されているが、ハイブリッドの授業については音声がかうまく届かないなどの課題が残る。ノウハウの共有、マイクの整備などにより、ハイブリッド授業についても必要に応じて運営の改善を図る。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	左記の理由と自己評価に賛同する。
	改善のための提言	左記の改善案に賛同する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
7	中期目標	100分授業の教育効果を高めるための教育方法について検討する。
	年度目標	③「基礎ゼミ」や各領域の入門科目、調査法科目、体験型科目、英語科目等、兼任教員と分担している科目については、互いにコミュニケーションを密にして授業の標準化や質の保証に努める。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

	達成指標	兼任教員との情報共有に留意するとともに、必要に応じてオンラインなどで懇談や振り返りの機会を設ける。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	基礎ゼミでは、オンライン懇談会を開催して学期の振り返りや課題点の洗い出しなどを行い、不参加の教員にはアンケート形式で情報収集を行った。キャリア研究調査法入門では、コーディネーターの専任教員と授業担当者として授業実施形態、試験・成績評価の情報を共有し、授業終了後の振り返りにより2クラス間のすり合わせを行った。研究調査法（量的・質的調査）では、学期始めの授業実施形態の情報交換、学期中の授業運営方法への質問に対する随時対応、授業後の振り返り等など、専任／兼任の間で連絡を密に取り合い情報共有を図った。体験型科目では、アンケートやメール等を通じて授業運営に関する工夫や課題について兼任講師を含む担当教員から意見の収集と共有を行い、課題については個別に相談や対応を行った。
	改善策	兼任教員との情報共有や振り返りの機会は設けられているので、さらに授業の標準化や質の保証などの授業改善に向けた懇談や振り返りを充実させる。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	左記の理由と自己評価に賛同する。
	改善のための提言	左記の改善案に賛同する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
8	中期目標	本学部の教育目標を達成するとともに、その教育成果を発信する。
	年度目標	①体験型科目については、引き続きその成果をわかりやすく可視化することに努める。
	達成指標	現在、ポスター発表や報告書作成など、さまざまな形式で成果報告が行われているが、コロナ後を見ずえて、より効果的な発信のあり方も検討していく。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	コロナ禍が続くなか、今年度も各担当教員とキャリアアドバイザーの尽力により、ポスター発表、報告書のとりまとめが行われた。キャリア体験事前指導・キャリア体験学習（A・Bコース）については、今年度から印刷からPDFファイルによる共有に転換した。
	改善策	引き続きコロナ禍の制約のもとでの成果報告を余儀なくされているが、コロナ禍が収束した後の成果報告のあり方については今後も検討していくこととしたい。
質保証委員会による点検・評価		
所見	左記の理由と自己評価に賛同する。	
改善のための提言	左記の改善案に賛同する。	
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
9	中期目標	本学部の教育目標を達成するとともに、その教育成果を発信する。
	年度目標	②「学生活動サポートプログラム」を、より多彩な学生が活用できるよう工夫する。
	達成指標	ゼミ単位に限らず、より広範な学生によってプログラムが実施されるよう制度を改めるとともに、成果の発信の方法についても検討を加える。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	応募機会を春と秋の2回に増やしたが、恐らくコロナ禍の影響により応募総数はやや減少し、ゼミ以外からの応募も僅かであった。但し、春に不採択となったプログラムが修正の結果秋に採択されるなど、助成の可能性は広がった。活動の成果は、今年度もオンラインによる学生研究発表会において共有された。
	改善策	サポートプログラムの募集について、特に低学年の学生たちの目に留まるよう、学部掲示板

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

			の活用に加えて複数の手段を工夫していく。	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	左記の理由と自己評価に賛同する。	
		改善のための提言	左記の改善案に賛同する。	
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】		
10	中期目標	本学部の教育目標を達成するとともに、その教育成果を発信する。		
	年度目標	③調査法科目の全体像をより明確にし、学修の成果や活用のあり方について検証する。		
	達成指標	「キャリア研究調査法入門」から「調査法実習」まで、階梯性や応用性が実現しているかモニタリングを行い、必要に応じて改善策を検討する。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	春学期開始前に教務委員会の主導で「キャリア研究調査法ガイダンス」の機会を設け、体系的な履修およびゼミに向けての事前履修を強く促した。ガイダンス資料は学部掲示板でも常に参照できるようにしている。なお「調査法実習」については上記「教育課程・内容に関すること」の①を参照されたい。	
		改善策	コロナ禍の中で「調査法実習」の受講状況の改善は難しいものの、引き続き次年度を見すえて春学期開始前に調査法を含む履修ガイダンスを実施する。一方で、カリキュラム改革をめぐる議論の中で、調査法のあり方について学部全体でさらに検討を進める。	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	左記の理由と自己評価に賛同する。	
		改善のための提言	左記の改善案に賛同する。	
No	評価基準	学生の受け入れ		
11	中期目標	入学センターと連携しながら、定員管理の適正化及び入学者の質の向上に努める。		
	年度目標	①入学者の定員管理を厳格に行うとともに、特別入試と一般入試の割合の妥当性について検証する。		
	達成指標	2021年度入試に導入した自己推薦の専願化および英語外部試験利用、外枠留学生について、入学者のモニタリングを通してその成果を検証するとともに、グローバル体験入試の定員の妥当性について検討する。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	自己推薦の専願化および英語外部試験利用、外枠留学生については、検証の結果、大きな問題はないとする結論に至っている。グローバル体験入試についてはやや定員が多い感を覚えているが、多様な入試形態を用意する観点からは必要であり、減員をするほどではなく、現状維持とする。経過観察を継続する。	
		改善策	経過観察を継続する。	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	左記の理由と自己評価に賛同する。	
		改善のための提言	左記の改善案に賛同するとともに、自己推薦入試の成績（筆記*面接のクロス）と合格者のデータを、執行部が変わっても経年で追えるよう、引継ぎがなされるとよいであろう。	
No	評価基準	学生の受け入れ		
12	中期目標	入学センターと連携しながら、定員管理の適正化及び入学者の質の向上に努める。		
	年度目標	②指定校入試による入学者数の適正化に努める。		
	達成指標	過去の志願状況や入学者の成績分析等を踏まえて、指定校とのより緊張感ある関係づくりに取り組むとともに、いっそう厳密な選定を行う。		
	年度末	教授会執行部による点検・評価		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

	報告	自己評価	A	
		理由	2021年度は既存の指定校のうち成績不振者がいる高校には「不芳レター」を発送し、改善が見られない場合には指定校から除外する方針を決めた。成績分析では、指定校入学者が成績不振に陥っているケースが少なくないことがわかった。	
		改善策	2022年度入試より、学部教授会主任を中心に、指定校入試の改革を行っていく予定である。具体的には、不芳レターに基づく指定校の除外の方針を継続するとともに新規に指定校を選定し、指定校の構成の適正化を継続的に行っていく。本方針は執行部が変わっても確実に引き継がれ、継続的に行われていく体制を構築していく。	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	左記の理由と自己評価に賛同する。	
		改善のための提言	左記の改善案に賛同する。入学センターから学部に来る基本データは、三年分の指定校名と実績のみなので、いつ・どの学校を外したか・加えたかについては、学部独自で経年データを作っておく必要がある。	
No	評価基準	学生の受け入れ		
13	中期目標	入学センターと連携しながら、定員管理の適正化及び入学者の質の向上に努める。		
	年度目標	③アドミッション・ポリシーに対する理解をさらに促すために、より有効な情報発信の方法を検討する。		
	達成指標	入学希望者に向けてウェブを通じた広報をさらに推し進めるとともに、学部シンポジウムを有効に活用する。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	コロナ禍により対面でのオープンキャンパスやシンポジウムの開催は再び見送られたが、学部パンフレットのメッセージや説明文、学部 YouTube の動画等を通じて、本学部の目ざすところをわかりやすい表現で伝えるよう工夫した。	
		改善策	年度の途中で実施した学生モニタリングにおいて、学部が掲げる目標が「ポリシー」として明確に意識されていないことが明らかとなったため、正式な文言を提示する機会を増やしていく。	
		質保証委員会による点検・評価		
所見		左記の理由と自己評価に賛同する。		
	改善のための提言	左記の改善案に賛同する。		
No	評価基準	教員・教員組織		
14	中期目標	3つの領域の教員バランスに配慮し、教員の多様性を確保することに留意し、適切な教員の任用を行う。		
	年度目標	①2020年度より専任教員が1名減り、また恒常的にサバティカルで2名程度の教員が不在になることを踏まえて、学部運営に関わる業務のいっそうの効率化と平等化を図る。		
	達成指標	サイボウズ等を活用して情報の伝達や共有、意見聴取等のスピード化、簡便化を図るとともに、学部教育、資格課程、大学院教育における教員負担の均等化を目指して、執行部を中心に関係教員と検討を推し進める。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	サイボウズでの教授会資料等の事前提示により会議時間の短縮を図るとともに、情報周知・意見聴取等においても積極的にサイボウズを活用した。また、執行部と大学院専攻長との意見交換を通じて、院の人的資源の学部教育への還流の可能性について検討するとともに、教授会でも問題提起を行った。	
		改善策	引き続き大学院担当教員の負担減と専任教員の学部への還流の方策を具体的に探っていく。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

		質保証委員会による点検・評価	
		所見	左記の理由と自己評価に賛同する。
		改善のための提言	左記の改善案に賛同する。
No	評価基準	教員・教員組織	
14	中期目標	3つの領域の教員バランスに配慮し、教員の多様性を確保することに留意し、適切な教員の任用を行う。	
	年度目標	②領域ごとの人員配置や年齢構成を把握して、中長期を見ずえた採用計画を立てる。	
	達成指標	常設人事委員会と執行部を中心に、中長期採用計画の策定および定年延長や名誉教授の手続きの明確化に取り組む。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	専任教員の定年延長や名誉教授の推薦に関わる学部規程の文言のチェックを行い、より正確な表現に改めた。また今年度実施された新規採用の人事においては、教員全体の年齢構成や大学院担当を視野に入れて人選を行った。
		改善策	引き続き中長期的な採用計画を意識していくとともに、カリキュラム改革を通じてより適切な領域構成を検討する。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	左記の理由と自己評価に賛同する。
			改善のための提言
No	評価基準	学生支援	
14	中期目標	学生支援の体制を整備し、多様な学生が意欲的に学べる環境を作る。	
	年度目標	①就職支援を効果的に実施するとともに、学部独自のキャリア教育を推し進める。	
	達成指標	キャリアセンターとの協働および差異化を意識しつつ学部独自のキャリア支援のあり方を検討する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	就職委員会の主導で、キャリアアドバイザーとも協働しつつ就職支援に向けて様々なイベントを企画実施した。またキャリアセンター長および同事務部長と執行部とのあいだで、センターの持つ豊富なデータを研究レベルで活用していく可能性について協議された。
		改善策	今後はキャリアセンターとの具体的な連携に向けて規程等の細部を検討するとともに、試行的に研究レベルでのデータ活用のあり方を探る。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	左記の理由と自己評価に賛同する。
			改善のための提言
No	評価基準	学生支援	
14	中期目標	学生支援の体制を整備し、多様な学生が意欲的に学べる環境を作る。	
	年度目標	②外国人学生に対する支援を強化する。	
	達成指標	国際交流委員会を中心にグローバル教育センターとも連携しつつ、留学生の学修支援により細やかに対応する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	留学生に対するアンケート調査をするとともに、グローバル教育センターと連絡を取り留学生の状況を把握した。また、Zoomを使った交流会を実施した。
		改善策	メーリングリスト作成や留学生懇談会の開催など、留学生の孤立化を 방지生活や学修を支

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

		援する方策を検討する。
		質保証委員会による点検・評価
	所見	左記の理由と自己評価に賛同する。
	改善のための提言	左記の改善案に賛同する。
No	評価基準	学生支援
14	中期目標	学生支援の体制を整備し、多様な学生が意欲的に学べる環境を作る。
	年度目標	③キャリアアドバイザー制度をより効果的に活用する。
	達成指標	キャリアアドバイザー制度運営委員会を中心に、コロナ禍に対応したより柔軟かつ多様な支援のあり方を検討する。
		教授会執行部による点検・評価
	自己評価	B
	理由	例年対面で実施していた「キャリアデザインCafé」を、12月に2回にわたってオンラインで実施したところ、例年に比べて参加者が少なかった。このため、スライドに声を吹き込んだ音声付き説明動画を作成して、「体験型選択必修科目プレガイダンス」として期間限定で公開した。
	改善策	「キャリアデザインCafé」については、初めてのフルオンラインでの実施において、参加状況に課題が残った。途中から「キャリアデザインCafe」ではなく、「体験型選択必修科目プレガイダンス」として広報を展開したが、次年度には最初から内容が明確に伝わる名称で広報を行うなど、広報戦略の見直しを検討する。
		質保証委員会による点検・評価
	所見	左記の理由と自己評価に賛同する。
	改善のための提言	左記の改善案に賛同する。広報においては、月日の進行とともに学生の関心事が変化することを踏まえ、「〇月ごろだと〇〇というキャッチフレーズが伝わりやすい」という観点からの工夫があるとよいであろう。
No	評価基準	社会貢献・社会連携
14	中期目標	教育・研究を通じて社会貢献、社会連携を行い、その教育成果や研究成果を適切に社会に還元する。
	年度目標	学部・大学院におけるキャリア研究の成果を、より広範かつ効果的に発信していくための方策を検討する
	達成指標	学部・学会紀要のオンライン化、アーカイブ化をさらに推し進め、より容易に研究成果にアクセスできるよう工夫するとともに、海外実習の再開後、キャリア体験学習（国際）の成果のウェブ上での発信に向けて検討を進める。
		教授会執行部による点検・評価
	自己評価	A
	理由	学部紀要、学会紀要とともに学部のウェブサイトを通してオンライン上で検索・閲覧できるようになっている。また学会主催の研究会についても、コロナ禍によるオンライン開催がほぼ軌道に乗り、毎回十分な数の参加者を得ている。一方、海外での体験型学習やSAについては本年度も実施が見送られた。
	改善策	引き続き研究・教育の成果をオンラインを通じて社会に向けて発信していく方策を工夫していくとともに、コロナ禍の終息後を見すえた社会連携のあり方についても検討していく。
		質保証委員会による点検・評価
	所見	左記の理由と自己評価に賛同する。
	改善のための提言	左記の改善案に賛同する。
<b>【重点目標】</b>		
オンラインと対面の併用の中で、学生たちが不利益を被ることなく学修を進めることができるよう努める。		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

<p><b>【目標を達成するための施策等】</b></p> <p>教務委員会の中に新たに設置した「オンライン担当委員」を中心に、執行部とも連携しつつ、受講状況のモニタリングや学生の困りごとの把握に務め、教授会やFDミーティングを通して学部全体で課題を共有し、対応に当たる。</p>
<p><b>【年度目標達成状況総括】</b></p> <p>コロナ禍が二年目に入り、前年度に蓄積されたさまざまな知見を生かして、オンライン担当委員によるモニタリングやリモートによる体験型実習の実施、ズームを介した非常勤講師とのコミュニケーションなど、おおむね円滑に教育活動や学部運営が行われた。この間に得られた経験を今後どのように活用していくかが次の課題となろう。その一方で、大規模なカリキュラム改革を視野に、大学院との協働体制作りや、入口戦略（入試改革）・出口戦略（就活支援・キャリアセンターとの連携等）をめぐる議論など、大枠の部分での検討が推し進められた。次年度以降は、これらを具体的なアクションに繋げていくことになる。</p>

**【2021 年度目標の達成状況に関する大学評価】**

<p>キャリアデザイン学部の 2021 年度目標は概ね達成されている。2 点達成が不十分である目標があったが改善策が提示されている。</p> <p>学業や成績不振者等、留級や留年等に関してだけでなく、就職を含めた卒業後のことについても、キャリアアドバイザーや就職委員会等学部独自の取り組みを通じてなされていることは評価に値する。一時超過していた入学者数の管理も正常化してきており、これに関する今後の対応も適正化が期待できる。コロナ禍の影響についても、オンライン担当委員による過去 3 年間の履修データの分析や、春学期の授業改善アンケート調査に学部独自項目を追加して受講状況のモニタリングを行うなど、努力が重ねられている。コロナの一定の安定的な見通しがたつまでにはもう少し時間が必要であることは社会的な共通認識でもある。小規模学部であり、いろいろな面で努力の跡が見えるだけに、その分教員個人への負担が増えていることは学部が認識していることでもあり、持続可能性の面からも対応が望まれる。</p>
---

**IV 2022 年度中期目標・年度目標**

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関する事】
1	中期目標	現行の教育課程を、その効果を随時検証しつつ遂行するとともに、新カリキュラムへの移行が滞りなく行われるよう努める。
	年度目標	①科目数のスリム化を視野に入れつつ、新カリキュラムの具体的な設計に向けて検討を重ねる。
	達成指標	2021 年度のワーキンググループによる検討結果を受けて、教務担当の執行部主任を中心に、項目ごと（調査法科目、体験型科目、等）により詳細なカリキュラム内容の検討を進める。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関する事】
2	中期目標	現行の教育課程を、その効果を随時検証しつつ遂行するとともに、新カリキュラムへの移行が滞りなく行われるよう努める。
	年度目標	②2022 年度新入生から適用される体験型科目（選択必修）の改訂版が円滑に開始されるよう留意する。
	達成指標	実質的には次年度から履修が始まる体験型プログラムの改訂版について、学生への周知・理解を図る。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関する事】
3	中期目標	現行の教育課程を、その効果を随時検証しつつ遂行するとともに、新カリキュラムへの移行が滞りなく行われるよう努める。
	年度目標	③コマ数を半減したにも関わらず受講者数が十分に伸びていない「情報処理演習」（ILAC 科目）について、改善の方策を探る。
	達成指標	受講しやすい曜日・時限の開講を工夫するとともに、授業内容の精査・改善に着手する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関する事】
4	中期目標	現行の教育課程を、その効果を随時検証しつつ遂行するとともに、新カリキュラムへの移行が滞りなく行われるよう努める。
	年度目標	④近年全学で推進されている学部横断型の各種プログラムへの積極的な参加を促す。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

	達成指標	履修ガイダンス等の機会や学部掲示板等での告知を通して、学生への広報をより積極的に行う。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
5	中期目標	オンラインと対面それぞれのメリットを生かした授業形態の工夫をはじめ、より効果的な教育方法の実践に努める。
	年度目標	①オンラインと対面の併用のなかで、学生が不利益を被ることなく効果的に学修を行えるよう努める。
	達成指標	授業改善アンケートや履修者数のチェックを通して、学生が適切なかたちで学修に臨んでいるか検証する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
6	中期目標	オンラインと対面それぞれのメリットを生かした授業形態の工夫をはじめ、より効果的な教育方法の実践に努める。
	年度目標	②「基礎ゼミ」(必修)をはじめ複数コマ展開の科目について、専任・兼任教員間のコミュニケーションを密にして授業の標準化や質の保証に努める。
	達成指標	各科目の取りまとめ役の専任教員を中心に、情報の共有や相談対応、振り返り等を積極的に行う。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
7	中期目標	オンラインと対面それぞれのメリットを生かした授業形態の工夫をはじめ、より効果的な教育方法の実践に努める。
	年度目標	③SAをはじめ、コロナ禍により過去2年間、学外での活動の中止を余儀なくされた体験型科目の多くについて、感染防止に努めつつ再開を目指す。
	達成指標	感染状況に対応した全学の行動方針に留意しつつ、学外での実習の再開に努める。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
8	中期目標	学部のディプロマ・ポリシーの周知およびその達成に努めるとともに、教育の成果について広く発信する。
	年度目標	①学部のディプロマ・ポリシーについて、学生への周知や理解を促す。
	達成指標	ガイダンス等の機会を活用し、ディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ツリー、カリキュラム・マップ等について学生への説明を重ねる。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
9	中期目標	学部のディプロマ・ポリシーの周知およびその達成に努めるとともに、教育の成果について広く発信する。
	年度目標	②調査法関連科目の階梯性や学修の成果について引き続き検証する。
	達成指標	履修ガイダンス等の機会に丁寧な説明を重ねるとともに、学生へのモニタリング等を通して学修の状況を把握する。
No	評価基準	学生の受け入れ
10	中期目標	入学センターと緊密に連携しつつ、定員の充足および入学者の質の確保に努める。
	年度目標	①入試合格者に対してより積極的な働きかけを行う。
	達成指標	学部ホームページやオンライン懇談会等を工夫して、合格者への丁寧なアプローチを試みる。
No	評価基準	学生の受け入れ
11	中期目標	入学センターと緊密に連携しつつ、定員の充足および入学者の質の確保に努める。
	年度目標	②長期的な視野に立って指定校入試の大幅な改革を行う。
	達成指標	入試担当の執行部主任を中心に、指定校入学者の追跡調査、新規指定校の選定、不芳レターの送付等を実施するとともに、指定校選定のルールを明確化し、かつ年度ごとの推移をアーカイブ化することにより、継続的な取り組みを可能にする体制を整える。
No	評価基準	学生の受け入れ
12	中期目標	入学センターと緊密に連携しつつ、定員の充足および入学者の質の確保に努める。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた、B:改善することができなかった。」を意味する。

	年度目標	③アドミッション・ポリシーに対する理解を促すために、より効果的な発信方法を検討する。
	達成指標	入学希望者に向けて、学部パンフレット等を通じた広報を行うとともに、ウェブを通じた情報発信に引き続き努める。
No	評価基準	教員・教員組織
13	中期目標	3つの領域それぞれの専門性やバランスに留意しつつ、研究・教育における学際性のさらなる伸長に努める。
	年度目標	①学部運営に関わるさまざまな業務のさらなる効率化と平等化に努める。
	達成指標	2021年度に学部内の各種委員を大幅に統合整理した効果について検証するとともに、必要に応じてさらなる調整を行う。
No	評価基準	教員・教員組織
14	中期目標	3つの領域それぞれの専門性やバランスに留意しつつ、研究・教育における学際性のさらなる伸長に努める。
	年度目標	②オンラインの活用による業務の効率化に引き続き努める。
	達成指標	教授会をはじめ各種委員会の開催や情報共有、意見交換等においてオンラインをさらに活用する。
No	評価基準	教員・教員組織
15	中期目標	3つの領域それぞれの専門性やバランスに留意しつつ、研究・教育における学際性のさらなる伸長に努める。
	年度目標	③大学院教育における教員負担の軽減や効率化を目指す。
	達成指標	学部執行部と大学院執行部のあいだで引き続き意見交換を行い、人的資源のより有効な配置について検討を進める。
No	評価基準	学生支援
16	中期目標	入口から出口までを見すえて継続的な学生支援を行い、多様な学生が意欲的に学べる環境を整備する。
	年度目標	①「キャリアアップ奨励金」を、より学部の趣旨にふさわしいシステムに改善する。
	達成指標	奨励金の対象項目を見直すとともに、奨励金額の傾斜配分の導入を試みる。
No	評価基準	学生支援
17	中期目標	入口から出口までを見すえて継続的な学生支援を行い、多様な学生が意欲的に学べる環境を整備する。
	年度目標	②外国人留学生に対してより具体的かつきめ細かな支援を工夫する。
	達成指標	グローバル教育センターとも緊密に連携しつつ、国交流委員会を中心に留学生への実効力ある学修支援を行う。
No	評価基準	学生支援
18	中期目標	入口から出口までを見すえて継続的な学生支援を行い、多様な学生が意欲的に学べる環境を整備する。
	年度目標	③キャリアアドバイザー制度をより効果的に活用する。
	達成指標	就職委員会およびキャリアアドバイザー制度運営委員会を中心に、学部独自のキャリア支援を実施する。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
19	中期目標	教育・研究を通して積極的に社会貢献・社会連携を行い、そのプロセスや成果を広く発信していく。
	年度目標	①より幅広く多様な学生が「学生活動サポートプログラム」を活用し、社会と連携するよう努める。
	達成指標	ゼミ単位に限らず、低学年の学生も含めより広範な学生からの応募を促す
No	評価基準	社会連携・社会貢献
20	中期目標	教育・研究を通して積極的に社会貢献・社会連携を行い、そのプロセスや成果を広く発信していく。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

年度目標	②学部および大学院におけるキャリア研究の成果や、学内外での学生のさまざまな活動について、多様な媒体を通じて広く社会に発信する。
達成指標	学部・大学院紀要のオンライン化に加え、体験学習の成果等についてもウェブ上での発信を検討する。
<p><b>【重点目標】</b> 科目数のスリム化を視野に入れつつ、新カリキュラムの具体的な設計に向けて検討を重ねる。</p> <p><b>【目標を達成するための施策等】</b> 教務担当の執行部主任のイニシアチブのもとで、学部として学生に身につけてほしい力を明確にしつつ、調査法科目や体験型科目など、主だった科目群ごとにカリキュラム内容を精査し、より効果的な学修の積み重ねが可能となるような新カリキュラムの構築を旨とする。</p>	

**【2022 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】**

キャリアデザイン学部の 2022 年度目標は適切に設定されている。昨年度の達成状況を踏まえて設定されている。科目数のスリム化、コマ数を半減したにもかかわらず受講者数が増えていない情報処理演習、教員の負担軽減のための業務の効率化、入試合格者への積極的な働きかけや懇談等、難問が多い。しかし、業務の効率化は学部の今後を考えると対応は必須であり、また、入試合格者への働きかけが功を奏することになれば、他学部へのモデルにもなるため、今後に大いに期待したい。オンラインと対面のバランスの問題は安定するまでに時間が必要であるが、学生希望はオンラインであるが、それを無条件に受け入れると教育が難しい状況に陥ることは目に見えており、経験を積み重ね、慎重に検討していくことが必要であろう。

**【大学評価総評】**

キャリアデザイン学部では、全体としてみると、全員体勢で非常によく学部運営がなされているとの印象が得られる。とくに FD ミーティングや就職委員会、就職カフェ、キャリアアドバイザーなど、学部独自の委員会を多く設置し、学部運営だけでなく、学修支援や就職支援、成績不良者や留級、留年者に対してもきめ細かな対応をしている点が注目される。COVID19 が与えた学生への影響については、オンライン担当委員を設け、学生アンケートやモニタリング調査を実施するなど、臨機応変に対応している様子が見える。こうした対応は随所に見られる。

学部の特徴の一つでもある体験型科目では、学生には学外での社会体験、とくに地方の農山村や被災地での社会体験の機会を提供し、そこで得られた経験をもとに教員は学部の理念や目的を見直す契機にしている点は、教員と学生が一体となって学ぶ姿を呈していて、非常に好感が持てる。

しかし、自己点検・評価シートのあちこちで触れられていることは、緻密な運営をしつつも小規模学部であるがゆえの教員への負担増に苦しんでいる様子である。この先の持続可能性を考えると早急に対応策を検討する必要があると考えられる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ  
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。